

育児ネットワークの信頼関係に関する社会学的研究

目次

1. はじめに.....	1
1-1. 少子化と母親孤立.....	1
1-2. 母親孤立に対する育児支援ネットワークの重要性.....	1
1-3. 研究目的——育児ネットワーク中の信頼関係.....	2
2. 育児支援ネットワーク.....	2
2-1. 少子化と育児支援者の重要性を主張する.....	2
2-2. 育児支援ネットワークの変化.....	3
2-2-1. 家族成員からのサポートの衰退.....	3
2-2-2. 地域育児コミュニティの希薄化.....	4
2-2-3. ママ友の重要性と否定的側面.....	5
2-3. 子育ての情報源になれるインターネット.....	5
2-3-1. インターネットにおける育児情報収集.....	6
2-3-2. インターネット利用の悩み.....	6
3. 育児におけるサポートネットワークと情報収集.....	7
3-1. インタビュー調査の概要.....	7
3-2. 調査項目.....	8
3-3. インタビューの結果.....	8
3-3-1. 子育ての協力者.....	8
3-3-1-1. 子育て支援者としての同居者についての語り.....	9
3-3-1-2. 家庭部外者の協力についての語り.....	14
3-3-2. 家族内外における育児ネットワーク.....	33
3-3-2-1. 同居者の協力.....	34
3-3-2-2. 別居者の協力.....	36
3-3-3. 育児の情報収集.....	39
3-3-3-1. 身近の情報収集.....	40
3-3-3-2. マス・メディア上の情報収集.....	42
3-3-3-3. オンライン・育児ネットワークを形成する必要性がない.....	55
3-3-4. どんなサポートを誰がしてくれるのか.....	55
3-3-4-1. 実質的なサポート.....	56
3-3-4-2. 精神的なサポート.....	58
3-3-4-3. 情報を得るサポート.....	60
3-4. インタビューによる考察.....	62
4. 子育てエリアの育児ネットワーク形成.....	63
4-1. フィールドワークの概要.....	63
4-1-1. 子育てエリアの概要.....	64
4-1-2. 子育てエリアの特徴.....	64

4-2. フィールドワークの結果.....	65
4-2-1. スタッフがいる子育てイベント.....	65
4-2-2. スタッフがいる「プレイルーム」とスタッフがいない「遊び場」	65
4-3. 考察——育児ネットワーク形成のきっかけには第3者が必要.....	66
5. 終わりに.....	67
6. 参考文献.....	68

1. はじめに

1-1. 少子化と母親孤立

『令和2年版少子化社会対策白書』によれば、世界全域の年少人口割合（国連推計）は26.2%であるが、日本の総人口に占める年少人口割合は12.1%と世界的に見て小さい。第2次ベビーブーム期（1970年代）以降、出生率は一途で下降している。日本の合計特殊出生率（1人の女性の一生に産む子供の平均数）は、2019年までは1.36であり、年間出生数は約86.5万人となる（厚生労働省、2020）。1980年代以降子育てサークルや子育てサロンなどは全国で行われ、このような親同士はお互いに支え合い、情報を交換し合う場が広がり、政府にも子育て支援の重要性を認識されていた（園井ら、2019）。しかし、園井により、1990年代から2010年代までの約20年間、日本は「エンゼルプラン」から「子供・子育て支援新制度」まで様々な育児支援政策を策定したが、少子化を改善する効果はあまり見られない。

また、近代化以降の労働者に必要とされる技能・知識レベルの高まりから、「少なく産んで大事に育てる」という工業化に対応した出産育児観を日本人は持つようになったと言われている（筒井、2017）。ゆえに、現代日本においては、子育てに関する経済と精力のコストが高くなると考えられる。その結果、十分な経済力がない家庭の場合、家族計画における希望する子供の数は少なくなる（筒井、2017）。子育て資源としての体力や経済力にあまり余裕がない夫婦であれば、望む望まざるに関わらず、実際に出産できる子供の数は減少しているのではないかと考えられる。このような状況について、子供が減り子育ても楽になったと考えることもできるが、実際はそうではないのではないのか。

内閣府によると、2019年時点で、子育て期にある30歳代、40歳代の男性のうち、それぞれ12.8%、13.0%が週60時間以上就業しており、父親の育児参加率は未だに低いのが現状である。さらに、核家族化、地縁希薄化の進行により、同居の祖父母、兄弟、子供を任せられる近隣住民などが少なくなっている。このような現状において、育児を支える力はますます低下し、主に母親が子育てに時間や精力を費やす日本では、育児は大変なことである。

そして、育児期間の母親が直面する問題として、経済的、身体的な疲れだけではなく、核家族化と地域社会の希薄化の進行によって育児の悩み相談や情報交換をできる相手の不在もある（武市、2014）。核家族化が育児に与える影響として、親になるまで子供の世話をしたことがないという女性の増加も指摘されている。母親の相談相手が乏しい場合、育児孤立が生じる（小川ほか、2013）。

1-2. 母親孤立に対する育児支援ネットワークの重要性

これらのことから、育児に参入してくれる家族、近隣住民、同じ年ごろの子供を持つ子育て仲間や、母親経験者などの相談相手が少ないということが、現代の母親たちにとって大きな問題となっていることがわかる。このような問題に対応するには、育児期間に母親の育児を支える人たち、すなわち育児支援ネットワークが必要となる（松田、2013）。一方で、多数の日本の共働き家庭においても、家政婦や家庭使用人を雇用する財力がない。お金で結ばれた育児支援ネットワークはほぼ不在であり、親密関係における信頼関係、共

通利益（子育て）で結ばれた育児の関係が必要である。

母親孤立の問題を改善し、安心して子供を生み育てることができるような環境を整備するためには、母親たちは家族の枠を超え、個人的や社会的な子育て支援ネットワークの形成が重要な課題になっている。その子育てに関するネットワークは血縁、婚姻、昔から付き合いがある家族メンバー、近隣住民、友人、同僚などとの関係の中から生み出し、また、子供を産む際にママ友、様々な育児支援機関などと構成されている。このネットワークの個人や団体は母親たちにそれぞれの協力を提供している。育児支援ネットワークは豊富なほど、協力者が多くなる傾向があるのではないだろうか。

子育てに専念し、社会的な労働をしていない母親において、年中無休で1人で子育てをするのは身体的、精神的な困難があり、家庭内外の協力者は不可欠である。さらに、現在、女性の高学歴化と社会進出に伴って、母親自身の育児にかけられる時間と精力が大きく削減されていることから、楽に育児ができるための育児の協力者を増えるのは重要な課題となっているだろう。

1－3．研究目的——育児ネットワーク中の信頼関係

地域コミュニティの弱体化や、進学、就職、結婚などによって実家を離れる若者の増加によって、子供が生まれた後の身近な育児支援ネットワークが減少しているが、出産する際には、ママ友や地域子育て支援組織、国家の政策の参入がネットワークの希薄を補足している。しかし必ずしも、ネットワークが豊富になるにつれて、母親の育児負担が減少するというわけではないと考えられる。育児は個人的かつ重要な問題であるため、母親は育児の協力者とどのような関係を持っているのか、どの程度育児の協力をお願いできるのかを考慮する必要がある。つまり、母親にとって、それらの紐帯の1つ1つが信頼あるものでなければならない。その協力者との信頼関係によりサポートの種と量が異なっている。それは、母親と協力者相互の信頼の度合いによって、ネットワーク構築の安易さが異なってくることに関係すると考えられる。本論文では、育児支援ネットワークからの協力と信頼関係の関わりを検討していく。

2．育児支援ネットワーク

近代以前の日本の育児は地域共同体が担っていたとされている（久木元、2013）。しかし、近代化によって、一世帯あたりの家族人員が減ったことが、育児支援ネットワークの縮小と身近な支援の減少をもたらしている。女性にとって恋愛結婚が主流となった現在、女性は依然として夫婦間の役割をお互いに維持しながら、子育てをすることが中心となっている（目黒ほか、2001）。かつては親族、地域の人たちに支えられていた妊娠・出産・育児の助け合いが薄れ、若い世代のみで行われる育児には様々な困難が生じている（榊原、2019）。子育てには万人に通用するような正解がないため、主に育児を担う母親は、ストレスと不安を抱え、新たなサポートを求めている。

2－1．少子化と育児支援者の重要性を主張する

内閣府によると、日本は1997年以降、子供の数が高齢者人口よりも少なくなり、少子社会となった。少子化問題は日本に様々な問題をもたらしている。たとえば、労働力不足

や、それに伴う消費人口の減少による経済への影響が懸念される。また、少子化の進行は人口の高齢化を進め、社会保障関係費用の現役世代の負担を増加させる（高野、2013）。これらのことから、出生率を増加させるための、子どもを育てやすい環境の整備は日本にとって急務である。

一方で、女性の高学歴化、社会進出が進み、男女共同参画社会の実現に向け、女性の社会地位も向上しつつある。一部の女性はキャリア向上を志すことにより、初婚年齢が上昇し、晩婚化が進んでいる。晩婚化は結婚制度の否定というわけではなく、条件整備が揃うまで結婚の時期を遅延したいがために起こっている（目黒ほか、2001）。晩婚化にしたがって、第一子出生時年齢、いわゆる初産の年齢が上昇し、子供が欲しい欲しくないに関わらず、出産できる子供数は減少しているわけである。このような女性の社会進出は、家族人員の減少に連関するという見方がある。しかし、バブル経済崩壊後、男性の収入のみでは家庭を支えることが難しくなり、女性の社会参画が要請されているため、女性も働く必要が出てきている。

厚生労働省によると、少子化の要因として、「育児の心理的、肉体的負担に耐えられない」という理由が多くみられる。また、晩婚化の要因としても、女性の経済力の向上や独身生活の方が自由ということのほか、家事、育児への負担感や拘束感が大きいということが指摘されている。

人口減少を改善するため、1980年代以降、当事者や支援者や研究者たちは、少子化を問題にしているのではなく、家庭で母親1人が担う子育て困難に対して子育て支援の必要性を主張するようになった（園井ら、2019）。家庭内労働の専門家が少なくなったため、高度経済成長期のような夫婦役割分業は無理のあるライフスタイルとなってきた。育児の主役である母親が子育てに費やす時間と精力は、減少傾向にある。そして、家政婦やベビーシッター等の家庭使用人を「家」が雇うケースが少なくなっていること、都市化の進行によって家族メンバーが減少していること、近隣関係が希薄になっていることなども、母親に育児の不快をもたらす要因となっている。これらのことから、現代社会における子育て支援の在り方を提案することは重要と考えられる。育児の不快は、働いている母親に限ったことではない。園井らにより、専業主婦として子育てをする母親は、働いている母親よりも世の中の母性愛神話のストレスや育児の不安、育児負担感を募らせる傾向にある。つまり、働いている母にせよ、専業主婦の母親にせよ、母親は家事と育児のサポート、または「家」の内外の支援してくれる精神的な協力者を求めている。

2-2. 育児支援ネットワークの変化

近代以前の子育てと比べ、都市化の進行により、拡大家族の減少、近隣住民との疎いなどにより、親密関係を持つ育児ネットワークは希薄化している。一方で、育児支援組織、ママ友、インターネットのような親密関係を必要としない育児ネットワークは、現在その不足を補っている。

2-2-1. 家族成員からのサポートの衰退

親族、身近な友人・知人などは、育児を手伝ってくれる相手、サポートの提供者として、母親の不安や不満を聞いてくれる相手になると言われている（久木元、2013）。しかし、少子化、核家族化の進行により、祖父母、兄弟がいなく、同じ年齢層の子を持つ子育て仲間も少なくなり、育児についての身近なサポートが衰退している（小川ほか、2013）。一

世帯における子供の数の減少に反比例するように、育児ニーズは高まっている。母親の努力によって子供を優秀に育て上げなければならないという社会的なプレッシャーが、強くなっている。

身近なサポートを担ってきた大家族の減少とともに、日本の伝統的な「産後の肥立ち」、いわゆる産褥期のケアを大切に、疲労困憊した母体を手厚く世話する文化も伝承されなくなった（榊原、2019）。小川たち（2013）によれば、このような伝統文化のみならず、より個別的な子育てのコツや工夫についても、親や地域の人々から伝承される機会はほとんどなくなってきている。

子育てをする親たちは、初産までの自らの経験や身近なモデルがほとんどない状況であり、なおかつ育児スタイルの著しい変化によって親世代の育児経験を参考にすることも難しくなっている（松田、2013）。たとえば、「紙オムツより布オムツがいい」、「ミルクより母乳」、「早くから保育園にやって可哀想」などの祖父母世代の考え方が時代にそぐわないと考える母親は多いだろう。このように、世代から世代への習慣に則った育児知識の伝統的伝達ルートが、都市化、核家族化の中で後退している（河田ほか、2013）。つまり、育児中の母親にとって、家族メンバーからの信頼できるサポートは衰退している。

2-2-2. 地域育児コミュニティの希薄化

少子化の問題は深刻であり、政府、自治体などは出生率を回復させるために、様々な育児支援策を策定している。子育ては、家庭だけの問題ではなく、国、地方公共団体をはじめ、企業・職場などを含めた社会全体で支援されるべきものである（高野、2013）。厚生労働省は、夫婦で家事・育児を分担するような家庭生活における子育て支援策を強化している。また、核家族化の進行に伴い、育児の孤立感や不安感を招くことにならないよう、安心して出産できる母子保健医療体制を整備するとともに、地域子育てネットワークづくりを推進している。

子どもを喜んで生み育てることを目指し、各地で子供家庭課、育児支援センターやNPO法人など育児支援拠点を様々な形で設置されている。そこでは、専門性を有する人と相談したり、地域の育児知識を共有したり、子育てしている親たちのネットワークを作ったり、子育ての手助けをもらったりすることが可能となる。家庭と従来のコミュニティを超え、様々な人と交流できる。

現在、社会的サポートとして、延長保育など規制緩和が進み、子供たちの施設利用の無料化など、行政的な努力もされてる。また、他業種からの保育参入も増加している。子育て中、家庭の代わりに、子どもの健全な育ちを支えてくれる保育所は、重要な社会的サポートとして機能している。しかし、認可保育所の不足により、入所を希望してもできない待機児童問題が深刻化している。認可外保育所もあるものの、質や価格の面で不安を持つ子育て世帯は少なくない（久木元、2013）。保育所からのサポートだけでは、母親の育児ニーズを満足させられる状態にはない。

また、子供を保育園に預ける前段階の社会的サポートも不足していると考えられる。たとえば、出産後に、家族の関心が母親から赤ちゃんに移ることに起因する産後うつ病、児童虐待など、母親の心理的な問題も生じている（榊原、2019）。しかし、母親のメンタルヘルスに関する社会的サポートは不足しているのが現状である。たとえば、日本における妊婦の自殺の主要な原因の1つが産後うつ病であるという深刻な状況は認識されているものの、うつ病のリスクが最も高まる産後1ヶ月間は、公的なサポートの空白期間となっている（榊原、2019）。

以上のように、専業主婦がいる家庭にせよ、共働き家庭にせよ、家庭内・外の育児支援ネットワークの脆弱性が指摘されており、母親の心身的な負担が重くなることで、育児についての悩みやストレスは増加傾向にある。現代社会の家族化や都市化に起因する人間関係の希薄化や地域コミュニティの減少・不在などに由来する「孤立」が、子育てを担う主婦を一種の社会的マイノリティにさせている現状も見えてくる（高谷、2019）。日本の母親たちは、信頼でき、役に立つ育児支援を求めているのではないだろうか。

2-2-3. ママ友の重要性と否定的側面

これまで見てきたように、高度経済成長期以降、家族内部の育児支援ネットワークは縮小している。これに伴う現象として、1人で赤ちゃんを世話することに疲れて、イライラを抑えられない母親が増加しているという指摘もある（榊原、2019）。育児を行う若い世代は、従来の友人に手伝いを求めようとしても、お互いの生活上の拘束時間（仕事、家事等）が増してきているゆえに、生活環境が異なる友人との対面コミュニケーションのきっかけが著しく減少してしまう。また、育児中の女性は新しい人間関係を構築するきっかけが少なく、新たに友人をつくるのが容易ではない（宮木、2004）。ゆえに、育児コミュニティの外にある従来の友人ではなく、共通の子育てについての話題を持つ周囲の母親、ママ友との関係を構築することは重要である。同年代の子供を持つ母親たちで構成される子育て仲間が、育児サポートのネットワークとして、従来の家族や近隣住民によるコミュニティを代替するようになった（久木元、2013）。子育て仲間がお互いに援助を行っていく母親たちで形成された育児支援ネットワークは、重要な育児資源となる。

その一方で、河田ら（2013）は、閉鎖的、排他的な人間関係のしがらみにはまり込む危険性を指摘している。たとえば、相談相手が多過ぎるがゆえに、どの子育て仲間のアドバイスを選択すれば良いのか悩んだ結果、逆に不安を高めてしまう。また、子育て仲間間で競争意識が生まれ、子育て仲間の言動や育児行動との比較が新たな育児不安を生んだり、子育て仲間間の不和に巻き込まれたりするなどの問題をもたらす可能性も指摘されている（河田ほか、2013）。特定の友人として、子育て仲間とどの程度の関係を結ぶのかは匙加減が難しく、母親たちの悩みの種である。また、ママ友と時間や感情をかける深刻な付き合いをする必要性を感じない母親たちは、ママ友と信頼関係を構築するのは難しい。育児と特性により、ママ友は強力な育児支援者になるのも容易ではないであろう。

2-3. 子育ての情報源になれるインターネット

現実空間の身近なサポートと社会的なサポートが衰退している現状において、メディアの情報提供・獲得能力の重要性が注目されている。1980年代頃には、育児雑誌が主な情報提供源として機能していた（河田ほか、2013）。育児雑誌は、流行や読者の変化に柔軟に対応してきたため、現代の育児の方向性は、育児雑誌に大きく影響を受けている（山田、2005）。その後、固定電話やパソコン、携帯も情報提供源となった。

そこで、2000年頃に普及したインターネットが、情報の入手先として大きな役割を果たすようになった（外山ほか、2010）。インターネット技術の進展により、リアルタイムでの回答が可能になり、操作しやすいスマートフォン、タブレット端末が登場し、時間と場所に縛られないため、現代の母親が求めている情報源に合致していると言えるだろう。

2-3-1. インターネットにおける育児情報収集

外山ら（2010）の調査によれば、年齢、学歴、就業状況、経済状況にかかわらず、90%を超える母親がネットに接続できるパソコンや携帯電話を所有しており、その半数以上が毎日ネットを利用している。調査対象者の母親のほとんどについて、授乳離乳に関する情報、医療機関に関する情報の収集、さらには発育および子育ての悩み相談のためにホームページを閲覧した経験があった。

インターネットは、地理的に隔絶した条件にある女性たちをつなぎ、地域コミュニティの補完・代替の機能を持つ新たなコミュニティを形成させている（熊井ほか、2003）。身近な家族、特定のママ友がいない、社会的な子育て支援組織へ行けない場合でも、ある程度は希望する支援をネット上で受けることができるだろう。

このようなインターネット上に形成されるコミュニティは、乳幼児を抱え外出もままならない育児期の親にとって大きなサポートとなる可能性が指摘されている（外山、2010）。現代の母親は、デジタルメディアをうまく使いこなし、育児の情報収集にインターネットを利用するきっかけが多い。インターネットからのサポートにおいて、全国各地の母親と交流し、子育てに関する相談をし合ったり、悩みについての共感をもらったりすることは、重要な役割を果たしているのではないだろうか。

若い母親たちは、SNS における情報の交換や共有などを重視し（山田、2005）、SNS 上のママ友との交流で、育児情報の共有や育児生活に関する共感を得ている（武市、2014）。物理的なサポートがない場合でも、インターネットが、感想の発信、ストレス解消、気分転換などメンタルヘルスのサポートを可能にしている。

2-3-2. インターネット利用の悩み

武市（2014）によれば、SNS を利用している母親には、インターネットの利用時間が長い、インターネット情報に対する信頼度が高い、機械操作に対して困難さを感じていないという特徴を持つ者が多い。ただし、インターネットが操作出来るというだけでは、情報をうまく利用できるということに繋がらない。ネット上におけるコミュニケーションの大部分は、面識がない他者であり、入手する情報もそのような他者から発信されたものである。母親たちの、情報を適切に収集し批判的に吟味して利用できる能力には、個人差があり、子育てに対する自信などにも差があることが分かっている（住吉、2015）。その差によって、ネット上の育児情報に対する信頼度が異なっている。この点について住吉（2015）は、ネット上の育児に関する情報は、母親にそれを分析的、批判的に受け取る能力があればよいが、その能力が低い場合には、逆に彼女らの不安を増大する、もしくは誤った知識を得てしまうなどの弊害もあると指摘している。

その他にも、常に SNS に接さずにはいられない状態に陥る SNS 疲れの問題や、不特定多数の利用者によるオンラインの議論やコミュニケーションの結果、プライバシー情報の漏洩や他人への誹謗中傷といったトラブルが発生する恐れがある（橋本ほか、2009）。上述のように、インターネット環境と、そこで発信されている情報についての判断能力の有無は、母親のネット利用に大きな影響を及ぼすと考えられる。インターネットは情報源になる同時に、信頼度によって慎重する必要があるだろう。

3. 育児におけるサポートネットワークと情報収集

3-1. インタビュー調査の概要

本研究では、子育て中の母親 8 名に対して半構造化インタビュー調査を実施した。対象者は、弘前市役所こども家庭課、駅前こども広場、育児支援 NPO、知人から紹介してもらった。インタビューは、母親の生活、育児に対してのニーズと解決策についての以下に示す質問項目を踏まえた上で、子育てに関するライフストーリー全体に着目する。

対象者は、子育て中の母親であり、小学生以下の子供がいることを条件とした。新型コロナウイルス感染症の流行により、インタビューは対面以外に、LINE 電話を使用している。

表 1. インフォーマント一覧

対象者	年齢	子供数	職業	学歴	日時	時間	インタビュー番号	実施方法
A さん	26 歳	1	事務職	高校	2021 年 6 月 15 日	15:00—16:00	インタビュー 1-1	LINE 電話
					2021 年 7 月 15 日	14:00—15:00	インタビュー 1-2	
					2021 年 8 月 25 日	10:00—10:30	インタビュー 1-3	
S さん	49 歳	2	接客	高校	2021 年 6 月 18 日	14:00—15:00	インタビュー 2-1	LINE 電話
Y さん	33 歳	2	接客	短期大学	2021 年 6 月 22 日	10:00—11:00	インタビュー 3-1	対面
K さん	39 歳	1	人事職	大学	2021 年 8 月 09 日	11:00—11:40	インタビュー 4-1	LINE 電話
H さん	28 歳	1	育休	大学	2021 年 8 月 11 日	13:00—14:00	インタビュー 5-1	LINE 電話
R さん	40 代	3	育児関係	未知	2021 年 8 月 19 日	14:00—14:30	インタビュー 6-1	対面
T さん	39 歳	1	教育関係	博士	2021 年 8 月 23 日	14:00—15:00	インタビュー 7-1	LINE 電話
N さん	34 歳	1	育休	専門学校	2021 年 8 月 27 日	14:00—14:40	インタビュー 8-1	LINE 電話

3-2. 調査項目

表 2. 調査項目

1	同居・別居の親戚との付き合い
2	ママ友の数・知り合った方法・付き合い方
3	子育てに関する情報収集方法
4	身近な育児サポートの多少・有無
5	身近な育児サポートの利用実態
6	地域の育児サポートの多少・有無
7	地域の育児サポート利用実態
8	もっと育児支援・支えてくれる人を求めるか
9	マス・メディアの育児サポート利用実態
10	一日におけるインターネット利用時間
11	インターネットにおける育児情報を検索する時間・内容
12	オンライン・コミュニティの育児情報交換の頻度
13	SNS 疲れ、不安を煽れる、個人情報漏れ不安などに関する問題
14	ネット情報に対する信頼度
15	現実とネット上の育児情報の満足度
16	年齢
17	職業の有無・職種
18	配偶者の職業
19	学歴
20	配偶者の学歴
21	子供の年齢
22	子供の数
23	家族構成
24	居住地域

3-3. インタビューの結果

3-3-1. 子育ての協力者

先行研究から、現代日本の子育ては、子供を小さな労働力として養育するのではなく、大切な家族成員として大事に育てることである。子供の数が減少する一方で、育児にかかるコストはより高くなり、育児の苦労は減少していない。しかし、少子化による同年齢の子供を持つ母親の減少、居住地移動のための親族との別居、地縁の希薄化などにより、子育て中の母親にサポートを提供してくれるネットワークは失われつつある。現代の競争社会に適応できる能力をもつ子供を育てることを期待されることで、母親はストレスと不安を抱え、より有効なサポートを求めていることが明らかになった。

本節では、上記の調査項目を中心に、インタビューの内容を分析し、育児現場の中心にいる母親がどのようなネットワークを持っているか、そのネットワークになにを求めている

るのかを明らかにする。

3-3-1-1. 子育て支援者としての同居者についての語り

現在日本の家庭は、夫婦と子供のみが一緒に暮らしている場合が多い。ただし、離婚、死別でひとり親になることで、ひとり親世帯になる家庭もあり、実家に戻って祖父母と共に生活することを選択する母親もいる。同居者は母親に対して「家」の領域内で育児の協力者となるだろうか。また、同居者がいないシングルマザーは、どこに協力を求めているのかについて対象者たちの語りを整理してみよう。

表 3. 同居者が存在するかとその人からの協力

対象者	シングルマザー	夫以外の同居者	实际的な協力者	精神的な協力者	子供の年齢	性別
R さん	○	×	×	×	2 歳	男性
					4 歳	女性
					6 歳	男性
K さん	○	×	×	×	10 歳	男性
A さん	○	○	×	○	5 歳	男性
Y さん	○	○	○	○	9 歳	女性
					11 歳	女性
T さん	×	×	○	○	1 歳	女性
S さん	×	×	○	○	11 歳	男性
					11 歳	男性
H さん	×	×	○	○	7 ヶ月	男性
N さん	×	×	×	○	8 ヶ月	男性

いる——○　いない——×

I. 同居者がいないシングルマザー——「用がある時、協力を求めている」

R さんはインタビューの直前で、自身がシングルマザーであることを教えてくれた。現在は、保育園に通っている子供 3 人と一緒に暮らしている。彼女の実家は車で 1 時間程度の県外にあるため、祖父母と一緒に暮らしていない。R さんは臨時社員として、シフト制で子供関係の仕事に従事している。普段は、彼女 1 人で、悩むことが少なく日常的な子育てをしている。

劉：子供のくせとか、やるべきこととか、そういうことはどこから知っていますか？特に一人目の時は、経験がなかった……
R：職場は保育なので、そんなに悩まない……あと、職場にも先輩ママたちもいますから、そういうことで、小学校に上がる時は色々聞いてるし……

そして、R さんの子供は 3 人いるので、上の子が下の子の世話をすることもある。こうした子供たちの行動は、サポートとまでは言えないものの、母親の家事を減少させている。

劉：上の子は、したの妹と弟をお世話する時はありますか？

R：ある。ある。

劉：何ができますか。

R：お着換えの手伝いとか……好きでやってるし、下の子はやめよう、自分でやってるとか騒ぎあるけど……できないことは上の子にやってって言うし、上の子もうれしいし……三人で、親は手かけなくても……子供たちだけで、うまいことやってるので……

Kさんの場合は、離婚したため小学生の子供と2人で暮らしている。彼女の実家は現住所と相当距離がある県にあるため、祖父母と一緒に暮らしていない。Kさんの勤務時間と彼女の子供の通学時間はほぼ一緒で、子供の面倒を見る人がいないという状況はほとんどない。そして、子供は自立し、大人になってきたため、育児にかかる時間と精神力は子供が幼い頃より少なくなる。また日常的に、子供がある程度の家事手伝いをしてくれることもある。普段、育児に対して非常に悩んでいることはそれほどない。

劉：なんで大きくなったら使わなくなったの？

K：大きくなり、やっぱ、子供も自立し、楽になるんですよ。

劉：家事をやる時は、子供からの手伝いがありますか？

K：家事は、ごみ捨てと風呂掃除が彼やります。

しかし、一朝有事の際には、実家の協力を求めることがある。例えば、Rさんの勤務時間と子供たちの休憩時間が重なっている時には、子供たちを実家に預ってもらっている。

劉：もし仕事している時間と子供の休み時間が一緒になると……そのような場合がありますか？

R：日曜日かな……

劉：そういう時は、子供はどうしますか？

R：実家に、おじいちゃんおばあちゃんのところに……車で1時間ぐらい……

劉：その時は、おじいちゃんおばあちゃんの協力はもらいますか？

R：うん。

Kさんも出張があるときは、遠距離の実家に協力を求めていることがあった。さらに、万が一病気になった場合は他者の協力を求めようと考えている。

劉：別居の家族、例えば、親たちからの協力はありますか？遠いですか？

K：そうですよ。遠いですよ。秋田で……あの、コロナの前では、出張の時は来てもらってました。

劉：今は、ほとんど自分で子育てをやっていますが、もっと育児支援とか、サポートをくれる人は求めていますか？

K：今、私はもし、病気とか何があったり、倒れたりとかどうしようかなと思う……ですけど、それだけかな。

Ⅱ. 同居者がいるシングルマザー

Ⅱ-1 「母親も仕事しているため、実際の協力はできない」

Aさんがシングルマザーとなった原因は不明であり、現在、5歳の男児を1人で育て、彼女の母親（以下は祖母と表す）と同居している。祖母と一緒に住む理由として、祖母の協力を求めていることがあると言える。

劉：母親と一緒に住んでいる理由は、特に子育てのサポートをもらいたいとの考えがあるか？

A：子育てのサポート……うん……精神的なサポートをもらいたい……もらってるというのが一番大きいかな……と思います。親が保育園の送り迎えをしてくれえるとか、そういうのは全く……行動的なサポートがないけど、やっぱ、精神的なアドバイスなど……サポートをしてもらってると思います。

特に、祖母はAさんや子供との日常的な接触が多いため、彼女たちの習慣や性格のこともよく知っている。それ故、祖母とは子供についての話題になりやすく、一番頼れる悩み相談の相手になっていると考えられる。精神的なサポートは母親に頼っているが、Aさんの場合、祖母も働いているため、精神的なもの以外に実際のサポートは難しい。

劉：お母さんと一緒に住んでいるから、お母さんからの育児サポートが多いですね……

A：あああ……や！母も働いているので……基本的にサポートをしてもらってないです。

劉：今は、サポートを求めている時は誰が一番頼れますか？情緒的と行動的は別々で……

A：ええと、精神的にはやっぱ母親……行動的……なサポートは、ええ……いない。

さらに、祖母は高齢であり、「考え方が固い」「祖母のアドバイスが古い」「祖母の健康状態を心配」などの理由から、祖母に協力を求める機会はある程度限定される。家庭内に彼女に対する実際のサポートをしてくれる協力者がいないのが現状である。

劉：母親からその経験が、ちょっと古いかと思いますか？

A：ううん……自分の母親からの育児の答えはちょっと古いなと思うことがあるんです……

劉：例えば、どのような答えが古いついていう思いがありますか。

A：なんか……うん……子供がこけて、転んで、青タン、青アザができるじゃないですか？その時に……普通は、湿布を貼ったりっていうのをするのに……親から言われたのは、砂糖水を付けなさいって言われたんですよ。なんで砂糖水みたいな……でも、やっぱ、実際やってみると、腫れは退いたんですよ。

劉：あ！

A：腫れは退いたんだけど、そういうおばあちゃんの知恵袋みたいな……なんか、古い考えを……そういう豆知識？を教えてくれることもあったりとか、あとは、やっぱ、うん……何だろう、あと、なんなんだから、こうしない、こうあるべきっていう考えがあったりとか……じゃあ、例えば、じゃあ、例えば何だろう、直単に言うと、男の子だから、そんな簡単にそのこけただけで泣いたりとか、そういうのは男の子らしくないっていう風にいうたりとか、男の子だから、強くあるべきじゃないとか、そういうなんなんだから、こうあるべきという強い考えがたまにあったりとかは……

劉：子供を母親に預ける時は、甘やかしすぎの心配がありますか？おばあちゃんと孫ですから……
A：ああ……私の母親に預ける時？私の母親に預ける時は、やっぱ、私の母親だから、年を取ってる……私より反応が鈍い、体力もやっぱ落ちてるから、そういうことで大丈夫かな……子供を心配するより、母親が大丈夫かな……

Ⅱ-2「祖父母と一緒に子供たちを育てている」

Yさんは専門学校を卒業した後、北海道に住んでいた。上の子供が年長の時、彼女は子供2人を連れて弘前市に引っ越し、Yさんの両親（以下は祖父母と表す）と一緒に暮らしている。現在、子供たちは小学校に通っているが、Yさんの仕事は夕方から始まる。一日の中で、Yさんと子どもたちが会える時間はほとんどない。祖父母は子供たちの世話を日常的にしてくれたり、Yさんがいない時の子供たちの行動などについて話してくれたりすることが多い。

劉：じゃあ、そこからの、なんか、育児サポートが多いですか？
Y：はい、主に私の親です。爺ちゃん、婆ちゃん……
劉：今は、親と一緒にいる時は、子供に関する話が多いですか？
Y：うん！特に、私が一緒にいられない時間のこと……聞いたりとか、そういう感じかな。こういうことがあったよとか。

すなわち、子供たちの世話は、Yさんだけではなく祖父母も一緒に行っている。Yさんは、実質的な協力も、精神的な協力も祖父母から十分に受けることができている。

現在のYさんは弘前にママ友、友人がおらず、地域の育児施設も利用せず、祖父母からの協力のみで、子供たちを育てている。むしろ、祖父母の協力が十分であるからこそ、他の協力者を必要としていないと考えられる。彼女は、自身の育児支援者について十分であると感じてはいるものの、夕方から始まる仕事のため、子供たちとよく会えない現状を嘆いている。

劉：今は、家事とか、保育とか、子供のしつけとかはそういうサポートはほぼ親からもらいますか？
Y：はい。
劉：子育てをしているときは、もし何が悩みがある時は相談とか、共感を求める時は、親からもらいますか？
Y：そうですね。一緒に育てるといっても、また、私自身、結構夕方働いているから、合う時間はほんとになくなって……

Ⅲ. 夫婦世帯―「夫が一番頼れるが、制限がある」

本調査のインタビュー対象者の中で、祖父母と同居している夫婦はいない。「夫の出張が多い」、「実家は遠い」など様々な要因で実家と別居し、夫婦2人と子供のみで暮らしている。

劉：最後のことなんですけど、家族と一緒に住んでいない理由は何ですか？
H：ええと、旦那が、仕事で、転勤が多くて、そういうのかな。

劉：おじいちゃん、おばあちゃん住んでいるところは近いですか？

T：や、遠いです。九州地方なので……全然近くにいません。一回も会えなくて、コロナ……

夫は共同生活者として、日常的な接触があり、親密な関係を持ち、気軽に何でも話せる相手であり、彼女たちにとって一番頼れる協力者である。

劉：ご主人様は家事の手伝いとか、子供のしつけとかは、一緒にやったことがありますか？

S：一緒に、うん！協力的ですね。

劉：育児のサポートを求める時は、誰が一番頼れますか？

T：ええと、夫です。ほとんど夫です。

劉：サポートを求めているときは、どちらが一番頼れますか？

H：うちは、旦那が一番ですね。

本調査の対象者の中の夫婦世帯は、すべて共働き家庭である。Tさんの子供とSさんの子供たちは学校に通っているため、彼女たちはお昼の時間で働いている。NさんとHさんの子供たちは1歳未満の乳児であり、育児休暇を取っている。妻や夫が家にいる時間の多少にかかわらず、妻は主に子育てを担っており、夫が頼れる育児協力者であるものの、その度合いは対象者によって差異がある。

Tさんの夫は子供好きであり、家事の手伝い、情報収集、悩み相談などに関して積極的に彼女に協力してあげている。Tさんに対して、夫は力強い協力者と言える。しかし、帰りは夫の方が遅いため、協力できる時間は限定されている。

劉：お主人様からの家事や育児の手伝いが多いですか？

T：すごい多いです。やってくれます。

劉：ご主人様からの情報は多いですか？

T：夫から結構あります。色々……私が……どうしたらいいかなとかと思ったりすると、夫も調べてくれて、教えてしてくれたりとかしています。買ってみようとか、やってみようとか……など結構あります。

劉：情報はスムーズに行く時は、そのままですか？

T：うん。夫と、こんなの載ってたよとかっていうのを、一緒に……結構夫とこういうような話したりすることは多いです。

Sさんの場合も、家事や育児上の実的なサポート、悩み相談などの精神的なサポートを夫からもらっている。夫は自営業者であり、時間はある程度自由で、Sさんと協力的に子供を育てている。

劉：育児のサポートとかは、やっぱり身近な人からの方が多くですか？
S：身近？サポートは、ううん……家事とか、そういうのはやっぱり主人なのかな、家族、うん！
劉：子育てをする時の悩みとかを相談したいときは、ご主人さま……と多いですか？
S：うん、うん。友だち……かな、主人、友だちかな。

HさんとNさんは育児休暇中であり、日常的な行動はほとんど子供中心に規定される。夫たちは仕事のため、日中は家にいない。つまり、他の同居者もいないため、お昼の育児は母親しかできないと考えられる。

朝、乳児が起きれば、母親も起きて授乳をし、朝ごはんとお弁当をつくる。その後の午前中は、乳児と一緒に1時間半程度のお昼寝をするから離乳食を作り、家事を始める。夕方まで子供を中心とした育児をし、夫が家に戻った後は、いささかの手伝いをしてくれるので、自由時間を取ることが可能になる。確かに、生理的には、男性授乳は無理であるが、Hさんの夫は「オムツ変える」「寝かしつけ」などの育児の所作が結構できる。夜、夫が帰ってくるのは遅いが、できる範囲内でサポートをしてくれる。

劉：今、やっぱりお主人様からのサポートは多いですね。
H：そうですね。
劉：頼れますか？はははは……
H：はははは……でも、そうですね。離乳食とか、授乳とかはちょっとできないけど、オムツ変えたりとか、遊んだりとか、寝かしつけも結構できます。2時間、3時間ぐらいだったら、子供と旦那を留守番してみたいな感じで、自分は出かけたり時も、偶に……あります。

Hさんに対して、Nさんの夫はNさんがお風呂に入る時のみ、乳児の世話をしてもらうことができる。実際的なサポートは頼れないが、育児の話しや悩み相談は結構できる。

劉：彼（夫）からの手伝いが多いですか？
N：ええ……どうでしょう？ええと……お風呂の手伝いくれるけど、手伝いが多い……どうでしょう……例えば、自分はお風呂に入る時は、お世話してもらってはいます。そのぐらいですかね。
劉：家事とか、手伝いくれますか？
N：家事は……ちょっと、偶に手伝ってくれますけど、ほとんどでも自分でやっています。
劉：ええと、このようなこと（育児に関する悩み）は家族とかと相談する時はありますか？
N：旦那と結構話しましたが、家族とは話さない。

以上、調査対象者の夫婦世帯では、すべての夫たちは協力ができる。しかし、夫たちは家にいる時間が女性より少なく、実際的なサポートできるのは平日の夜と休日だけできる。それでも、親密な関係を持っている夫は女性にとって、精神的な頼れる相手である。

3-3-1-2. 家庭部外者の協力についての語り

先行研究に基づく、家庭の枠を超え、「家」の外部の協力者も育児ネットワークの内

部に参入してくれる。しかし、部外者はすべて同じ程度の協力を提供できることは断言できない。ここでは、対象者たちの話しから、部外者たちはそれぞれどのようなサポートをしているかを分析してみよう。

表 4. 家庭部外者からの協力は可能か

対象者	子供の通学状況	学校・保育園の支援	地域の育児支援	別居中の親族	ママ友	友人	近隣
H さん	未就学	×	◎	◎	◎	×	×
N さん	未就学	×	◎	▲	◎	×	×
R さん	保育園	▲ ◎	◎	▲	×	◎	×
A さん	保育園	▲ ◎	◎	×	◎	×	×
T さん	保育園	▲ ◎	◎	×	◎	◎	×
K さん	小学校	▲	◎→×	▲→×	◎→×	◎ ▲	×
S さん	小学校	▲	◎→×	×	×	◎	×
Y さん	小学校	▲	◎→×	×	×	×	×

实际的な協力——▲ 精神的な協力——◎ できない——×

I. 別居中親族の協力

I-1. 「実際の協力ができるとしても、精神的なサポートはもらわない」

現在、育児は母親 1 人が責任を負うものではないという認識が拡大している。母親にとって、同居者からのサポートのみでは解決できないこともあり、何らかの外部からの支援を必要とする場合もある。血縁があり親密な関係を持つ親族は、育児支援ネットワークの重要な一端と考えられる。

N さんは、夫からの实际的なサポートが少なく、夫の出張回数も多い。夫は主に相談役を果たしているが、実家からは洗濯や炊事などのサポートを受けることが多い。しかし、実家からのサポートは家事と子供の預かりまでで止まり、アドバイスを聞いてもらったり、悩みを相談したりといった精神的なサポートはほとんどない。

劉：実家からのサポートは多いですか？

N：実家からののは結構多いです。

劉：ええ……どのようなサポートがありますか？

N：ええと、旦那の出張は結構多くて、その時は実家へ帰るんですけど、実家に住んでいる人数が多くて、面倒を見てもらう……親は、料理とか洗濯とかしてくれるので、そこは結構助けるなと感じます。

劉：家族からのサポートって、親からの方が多そうですね。

N：そうです、そうです。母とか……

劉：実家からの意見とか、アドバイスとか聞きますか？

N：やっぱり、何だろう……聞けばアドバイスがあるんですけど、あの……母は何十年前に子育てしたので、何だろう……やっぱりネットとか雑誌とか書いてあることと違うっていうか……、昔のやり方、あんまり信用してない……

劉：何で家族と話しないですか？

N：うん……何だろう……やっぱり一緒にいるのは旦那の方が多から……話するぐらいで……家族の方は、早く預ける方がいいじゃないかっていう感じなので、これ以上話をしてない感じ……

I-2. 「実際の協力はコロナ前までできたが、年よりの親族に助言とか聞きたくない」

Hさんの義父母は車で2、3時間の県外に住んでいる。以前、1か月に1回ぐらい家事を手伝い来てくれていたが、現在はコロナの影響で会えなくなっている。また、Hさんの親、義父母（以下は祖父母と表す）はともに遠いところに住んでいるため、彼女は育児関係の助言を求めたりすることはない。そして、夫の母親は長時間幼い子供と共に過ごしてくれないので、Hさんは義母の育児にも不安がある。つまり、Hさんにとって、祖父母は育児の協力者となっていないと考えられる。

劉：ええ……家族とどのような付き合いがありますか？

H：ええと、うん……旦那のお母さんとお父さんは、車で、2時間3時間のところで住んでいますので、前まで、一ヶ月一回ぐらいに、家事を手伝い来てくれたりとか……はしてました。祖父母以外は、なかなか……コロナのこともあって、会えないですね。

劉：ご家族からの育児サポートは可能ですか？

H：ええ……なかなか難しいですね。

劉：家族からのアドバイスは、特に子育て関係のは古いと思いますか？

H：ああ……そうですね。あまり、親、自分の両親も、ちょっと県外に住んでいるので、あまりその育児関係で助言を求めたりしたりことはないです。

劉：預ける相手は違うなら、心配が違いますか？

H：うん……そうですね。例えば、旦那のお母さんとか、自分のお母さんなどと二人きりになって、ちょっと心配……心配っていいのか、本当に大丈夫かを思ったりします。

劉：え、それはなぜですか？

H：預けたことはない、と、子供と……自分の子供も含めて、他の小っちゃい子も含めて何ですけど、そんなに最近長時間、その小っちゃい子と一緒に過ごしてた人ではないので……小っちゃい子とのふりあい方も忘れてるじゃないかなって思ったりとか……

しかし、すべての親族が協力者になっていないのではない。Hさんには、ほぼ同じ月齢の乳児を持っている姉がいる。その人もこれまで母親未経験者であり、近くに住んではないが、不安を共有したり、育児情報の交換をしたり、世話の技術などを共有したりすることは多い。姉は問題を完璧に解決してくれる相談相手ではなく、ストレス発散、育児疲れの共感を求めている精神的なスポンサーのような存在である。

劉：じゃあ、そのような情報（ネット上の情報）は、どうやって対応しますか？他の人に聞きますか？

H：うん……そうですね。同じぐらい月齢の赤ちゃんがいる……自分のお姉さん、姉が同じ年齢の赤ちゃんがいるので、姉と一緒にこれは本当なのか、どうかななどっていうのを話したり、確認したりして……

劉：はい。お姉ちゃんは支援とか、サポートとかはしてくれる人ですね。

H：そうですね。姉も、でも、第一子なので、育児経験的には、ないんですけど、でも、同じ年齢の赤ちゃんがいますから、不安を共有したりとか、これがいいかなのお世話することが共有することは、気軽にできるので、そのお姉ちゃん存在も、ママ友と仲良く……情報を交換する必要はないじゃないかっていうのがあります。

また、日常的な協力ではなく、Kさん、Rさんは緊急時のみ子供たちを実家に預かって

もらうことがる。つまり、祖父母は遠方に居住している、忙しいなどの理由のため、日常的にはサポートをしてくれない。しかし、万が一の時は、別居の親族として育児中の女性を支援してくれる。

I-3. 「LINE やテレビ電話で、義父母と簡単な育児話しができるだけ」

Tさんは自分に親がなく、実親からの育児支援を受けることができない。また、コロナの影響で、結婚後遠いところに住んでいる義父母とも会えないので、実的な協力は全くないと言える。また、精神的なサポートを提供してくれるのは、ほとんど夫である。義父母とのコミュニケーションの内容は、夫本人のこと、夫が成長した地方の百日祝いする方法、よくある育児問題の対応策などである。物理的な距離を超えることはできないが、LINE やテレビ電話を用いて彼らとの関係を維持している。しかし、一般的な育児についての会話はできるものの、個別的な育児の情報やアドバイスなどを取集するところまでは至らない。

劉：おじいちゃん、おばあちゃんからの育児サポートはほとんどないですね。

T：そうですね。なんか、あの……この時どうしてましたかななどをちょっと聞きたいときにLINE で聞いたりとかしますけど、そのぐらいかな。あの、夫のことが分からない、夫の小さい頃は、どうやってましたかを聞くときに、ちょっと聞くぐらいで、子育てそのものをそんなに聞くがないかな……

劉：例えば、どのようなことを聞きますか？

T：ええと、あの、イベント……百日祝いとかそういう時に、なんか、やっぱ、夫の家族と同じようにやった方がいいかなと思ったり、あの、夫の小さい頃は、どうやってましたとか……地域は違うので、津軽と九州だと違うから、ちょっと同じようにやればいいかなと思って、そういうのを聞いて参考にして、お祝いとかされました。

劉：（外来の情報）おじいちゃんおばあちゃんに聞きますか？

T：私が、自分の親がいないので、多分いけば、聞いたと思うんですけど、夫の親に聞くのは、聞くのは聞くんですけど、そんな細かいところまでは、多分近くにいないから、スムーズに聞けないっていうところがあって、先に友達に聞いてると思います。

I-4. 「育児関係の親族訪問がほとんどない」

Sさんは、コロナ前まで、年2、3回は実家を訪問していたが一般的な親族訪問に留まっており、実家から育児支援をもらうことはほとんどなかった。さらに、コロナの影響で現時点では実家の親族と会えなくなっている。

劉：今は、祖父母たちと別居していますが、よく訪問とか、交流とかしていますか？

S：今は、あの、コロナなので、ここ何年かはちょっと行けてないですね。その、コロナ前まではね、後、お正月とか、お盆……私の実家の方には行ってます。年に2、3回ですね。うん！

II. 隣人・元の友人の協力

II-1. 「近隣は支援してくれない」

本調査の対象者の中で、近所の人と、子供の世話を任せられるまでの関係を構築している対象者は1人もいなかった。

劉：同じ地域に住んでいる人、近くに住んでいる人たちからの育児関係は可能ですか？
H：ちょっと無理ですね。ええと、アパートに住んで、挨拶をしたことはあるんですけど、それ以上は、ないですね。

劉：近くに住んでいる知人、隣人とかのサポートは可能ですか？
N：近くに住んでいる人、ほとんどはないですね。

Ⅱ-2. 「近くの友人、ママ友との育児付き合いがある」

隣人に助けをもらうことはできないが、従来からの友人やママ友が同じ地域に住んでいる対象者が何人かいる。支援元は隣人関係ではなく、友人やママ友の関係である。

劉：（ママ友）どうやって知合いましたか？
K：保育園の同級生で、たまたまに家が、近つがたりとか、そういう感じです。
劉：そのママ友たちと住んでいる地域が近いですか？
K：はい、保育園の時わね。

劉：その人（ママ友）との話は、ネット上、SNS で話していますか？対面のは多いですか？
どちらか？
A：ええと、私の場合は、その知り合った人は同じ地域で、すぐく家も近かったので、直接会うものもあるし……

劉：今の、身近な育児サポートは多いですか？祖父母と一緒にいないから、隣に住んでいる人も、友人もからのサポートとか多いですか？
S：あああ……そうですね。その前は、前だと、そ、そ、祖父母があまいなかったの、近くに友人とかですかね、はい、はい。多かったです。

Ⅱ-3. 「友人はある程度で相談役を果たしている」

血縁、地縁関係を超え、昔から親密な関係を持っている友人は、育児の協力者になる可能性がある。ただし、従来からの友人からの援助は、育児話で留まり、実際の手伝いはそれほどない。その人の育児経験に基づくアドバイスや、育児の悩みや他所からの情報の判断などについては、友人が相談役を果たしている。

劉：もし相談とかが、子供の、子育てをする時の悩みとかを相談したいときは？
S：相談？子供の？ううん……やっぱり、友だち……かな、主人、友だちかな。
劉：友だちはもとの友達ですね。
S：そうですね。

特に、親と義父母がいないTさんにとって、友人からのアドバイスはとても助けになっている。夫との相談で解決できない時や、他所からの情報の判断について悩んでいる時など、友人の相談に従って安心することがある。

劉：はい。ええと、今は、お友達と子育てについてのことを相談しますか？ T：そうですね。離乳食だけすごい見えます。
劉：子供のくせとか、やるべきことは大体ネットで知りますか？他は何がありますか？ T：他は、友だちに聞いたり、あの、ママ友っていうのか、自分の友達も子育てしている人たち、小学生の子供がいるとか、今幼稚園の年長3とかっていう人に、このような時はどうしてたと聞いたりします。 劉：友だちに聞くときは、その答えに対して不安とかありますか？ T：や、逆にすごい助かってます。こういう風にしたいけど、自分はここはうまくいかなかった、こうしたいようを教えてくださいとか、そういうなんだろう、その人がやったことでどうなったかっていうこと全部教えてもらったり……するので、私はいつもありがたいなと思って、お頼りにします。
劉：その時（ネット上の情報を確信できない時）はどうしますか？ T：友だちに聞きました。それは困るにならないようって言われて、YouTubeなら、ちゃんと寝てるから載せてるじゃんって言われて……そんなに深く考え過ぎなくてもいいかなと思いました。

シングルマザーのRさんにとって友人は、悩みがあるとき同僚や保育園の先生と同様に家庭外部の協力者として役立っている。

劉：もし悩みがある時は、誰と相談しますか？ R：お友達 劉：友だち…… R：昔からのお付き合い友だち。また、職場の人は、それこそ今度こういうのあるよ、ああいうのあるよを知ったときに、こういう行事あるんだ、こういう時どうやったというのを聞いたりする。

Ⅱ-4. 「友人は子供が持たないと、子供に関する話は出ない」

従来からの友人は、その人に子供がいるかどうかによって、子どもの話を出ないケースもある。また、子供がいる友人と会う場合は、お互いの子供と一緒に遊ばせることが目的である。ただ子供と一緒に遊ばせたり、子供について話したりする。

劉：友人と一緒にいる時も、その子供に関する話題が多いですか？ A：ええと、友だちってなると、友だちが子供がいる人だったら、そういう話にはなりません。子供のことはなるけど、いない人だったら、そういう話は全く出ないです。
劉：友だちと一緒に行く時はありますか。 A：は……うん……あります。けど、やっぱ、同じ年代の子だったら、一緒に遊べるけど、私の友達になると、今、こう、生み出したりとか、まだ、こう一歳になってない子供が多いから、どうしても、そういう小さい子を合わせた感じの遊び場っていうのが多い……

Ⅲ. ママ友との付き合い

Ⅲ-1. 「妊娠した際やイベント参加する時には、ママ友との付き合いが始めた」

従来の友人関係のみならず、母親たちは子育てのプロセスでママ友を作っている。ママ友は、幼い子供を持つ母親同士で友だちになった人である。妊娠後、育児イベント足を運

んだとき、学校の親同士になったときなど様々なきっかけで知り合い、付き合いが始まる。

劉：そのママ友の数は？

A：ううん……すごく少ないですけど、5人ぐらいです。

劉：ママ友たちとは、どこで知り合ったの？

A：ええと、高校からの友達という人もいれば、その、妊娠中に……そういう妊娠さんのサイトみたいな……あいうので、ご連絡をとりあって、仲良くなった人とか……もいます。

劉：ママともはいますか？

K：はい、います。本当に頼れる仲いい人は、1人ですね。

劉：その人（ママ友）とどうやって知り合ったですか？

K：あの、息子の小学校の入学式の時、隣の席で、その人も働いてで、仕事も持って、話が合いました。そこからですね。

劉：保育園の時のママ友は何人いましたか？

K：ほんとに頼れるのは2人いましたね。

劉：バドミントンをやるところで、ママ友はできますか？

K：私、そっちのママとあまり仲よくならないんですよ。

劉：今のママ友は大体何人いますか？

S：ママとの数……こち来てからですね。ううん……そうなんか……よくこう……2人とかかな。

劉：ママ友ですか？

T：ママ友って……もともと友だちっていう人もいたり、子供産んだことで、仲良くなったのはママ友ですかね。そういう人も1人か2人がいます。

劉：そのママ友はどうやって知っていますか？

T：職場がたまたま一緒に、職場で全然話さなかったけど、たまたま出産は一月違いなので、それ以降、一緒にイベントへ行ってみようっていて、行くようになって、それで話すようになりました。

劉：ママ友とは、どのような付き合いをしていますか？何人いますか？

H：ママ友は、5人ぐらいです。

劉：その5人とどうやって知っていましたか？

H：LINEで話したりとか……あとは、そのママ友とヒロロのイベントへ来る人なので、イベントの時に、話したり……が多いですね。

劉：今ママ友は何人いますか？

N：ママ友は……ええ……連絡が知っているのは4人ですけど、結局話するのは1人です。

劉：その人とどうやって知っていますか？

N：ヒロロで結構子供連れイベントがありますけど、そこに同じ10月までのこので、同じイベントに参加して、顔目知りになった、話すようになって、子育てに関することは何かもこういう時どうなどは聞いたりできる感じ……

Ⅲ-2. 「軽い相談やイベントへ行くことがあるが、子供のことに限定される」

ママ友との付き合いは挨拶をしたり、一緒に遊びいたり、軽く情報交換をしたり、イベント行ったりすること以上は難しい。また、子供が成長するに従ってやりとりや、会う機会も少なくなり、子供を預かってもらうなど実際のサポートも受けられない。深刻な悩みがある場合、同居者、保育園の先生、地域の育児支援センター等に比べて、ママ友は育児支援者としてそこまで役に立たない。

劉：その人達（ママ友）とは、よく何を話しますか？

A：大体同じ年代子供の、今子供が年中3とか……っていう人が多いんで、やっぱ、今の、例えば、今の5歳なんで、七五三どうするとか、小学校は再来年だけど、もう何か準備してるとか……そういう話をします。

劉：今はママ友たちと一緒に遊び行くのは……ありますか？

A：あります。

劉：子供連れて？

A：うん。

劉：子供がいないときは、ママ友各自で、その付き合いがありますか？

A：ああ、そうですね。ええと、たまに、ママたちが何かしたいよねって思う時は、申し訳ないけど、子供が保育園、土曜日とか、子供が保育園にやって、ちょっとじゃん、大人たただけで、ご飯、美味しいご飯とか……

劉：会える……大体一週間何回とか、一か月何回とか、会えますか？

A：会う頻度は……うん……コロナ前は、3ヶ月一回ぐらいあってたんですけど……コロナになってからは、ちょっとけっこう、今間が空いていますね。

劉：大体どのような付き合い方ですか？

K：家に招いて、食事をしたりとか、あと子供同士泊りに来たりとか……がします。

劉：よく一緒に外で遊ぶことはありますか？

K：もうないです。どちらか家に行くとか……あの、保育園の頃のママ友はそうでした。一緒にどこか遊びに行くとかがあったんですけど、今はちょっと違うかな……

劉：もし何かある時は、子供の友達の母親からの協力がありますか？

K：あります。小さい頃一緒に遊びに行きます。

劉：mixiで友だちになる人もいますって、その人たちは今、付き合いはありますか？

K：今、ある人もいるけど、でも会ったりはしてないです。偶にLINEするぐらいです、元気？とか

劉：会うことはないって、コロナの影響ですか？または、別の理由ですか？

K：コロナプラス、なんか、育休中とか、子供は小っちゃいごろにはやっぱり待ち合わせしたり、ランチしたりしてんですけど、ええと、すごく近いところに住んでいるわけでもなくて、子供は小っちゃいごろは、情報は欲しかったんですよ。しゃべりなかったとか、人と……子供は大きくなったら、成長したら、自分も仕事したりし、そこまで必要性を感じないっていうのか、その時の人たちの中で、今はまだ友達という感じ……

劉：（相談がある時）ママ友は？

S：はい。ママ友はも……でも、その友達と比べると、そこまで、こう深くは話せないかな。さっさと、軽く、うん！

劉：そうですか。イベント以外のことは付き合いがありますか？

T：家に来たりことはあります。家に来て、一緒に子供遊ばせて、お話しとかはしました。

劉：そのイベントは誰と一緒にいきますか？

T：最初は、1人で行ってました。で、そのママ友、先言った友達と一緒にしてみようとかもあります。

劉：ママ友からの手伝い、育児サポートはありますか？

T：や、預かりはしないですね。お互い、一人目ですから、全然よく分からなくて、これどうしてるといふ相談ばかりで、だから、預かたりとかはっていうよりは、年も同じぐらいなので、離乳食どうしてるとか、なんか、そういうようなお互いに情報交換っていう感じです。

劉：イベントでの話以外は、どのような付き合いがありますか？

H：イベント以外は、やっぱ、今、同じ月齢、年齢の子が多いので、悩みは同じなので、その離乳食とか、あと、病院、その病院はいいとか、あと、保育園とかについて話したりとか……しています。

劉：イベント以外で、会えますか？わざわざママたちは一緒に集めて、何をする時はありますか？

H：うん……コロナじゃなかったたらあるかもしれないけど、コロナなので……なかなか……私も誘えないし、向こうも誘えないし、一回もないですね。

劉：ママ友との関係は、その関係自体については何が不安がりますか？

H：ママ友と言っても、そんなに……ははは……イベントで会ったりとか、LINE ちょっとするぐらいなので、そこまで、あまり、関係が吹き込めってない。特に仲がいい人は一人ぐらいいますので、そんなに人間関係で悩んではないです。

劉：ママ友とは何を話していますか？

N：最近では、子供の成長に関して、あの、離乳食は何を食べてるとか、あとは、例えば、ハイハイできるよとか、成長については結構話す。

Ⅲ-3. 「ママ友と本当の悩みは言えない、関係は深く行けない」

プライベートな子育て問題の相談をママ友にするのには、さらに抵抗感があり、ママ友と深い関係を持つ必要を感じない対象者もいる。ママ友との付き合いは表面的で、距離感があり、精神的なサポートを受けるのは難しい。

劉：ママ友たちとは深く話せないって言いましたけど、それはなぜですか？
A：うん……それは……はは……やっぱその、私の子供が、吃音ってわかる？あの、しゃべる時に……あ、あ、あ、あのねとか……その最初の言葉が繰り返したりとか、そういうちょっと、こう、しゃべり語り癖がある。だか、そういうのを……やっぱ……私はすごく悩んでるんですけど、それをママ友と相談時に、うん……どう思うかなで言う……やっぱ、変って思う人もいるし……やっぱ、そういうので、いじめっていうのもあるから、それを考えたときに……どこまで……こう……自分の相談だったり、悩みをこの人に打ち上げっていいのかなとか、母親から子供に移っていくから……その母親がうわって思ったなら、子供もそれを真似するだろうっていうのを考えると……やっぱ、深く言えなかったりっていうのがある。

劉：はい、分かりました。じゃあ、なんでバドミントンの親たちと深く行けないですか？
K：ですね。なんでだろう、必要性も感じないし、興味もないし、でも、やっぱ情報が必要なので、話さなきゃな……と思いますけど。

劉：ママ友からもそういう意見を聞きますか？
N：本当に悩む時はママ友にじゃなくて、やっぱり助産師さんと保健士さんと話して、ええと、悩みみたいなことはあまりママ友に言わないっていう感じです。
劉：それは、なぜですか？
N：何ですかね。まだ距離があるかな……
劉：その人の話は深く行けますか？
N：まだ深くはなくて、一応距離を取っておいて、ヒロロでイベントがある時だけ顔……合わせしている。以外、会うことはないですね。

劉：普通のママ友たちとは、話は深く行けますか？
H：うん……あまり……はははは……行かない。
劉：なぜですか？
H：うん……ちょっと自分が人目知りするのは……なかなか……自分から、これはどうするのなど、話しかけるは難しいです。結構聞き役……

Ⅲ-4. 「ママ友から友だちとなり、頼れる」

例外としてKさんは、ネット上で知り合った人や、子供の入学式で知り合った人とママ友になり、彼女らはその後頼れる友人となっていく。彼女らとは深い内容の話しもできる。

劉：その人たちとの話題とかは、やはり子供関係ですか？
K：あと、自分のことになってきましたね。子供だけではなく、前は子供だけでした。
劉：はい、そうですか。その人たちとのコミュニケーションは深くまで行けますか？
K：あの、今残っている人は深いですね。
劉：今のママ友とも同じですか？
K：ええと、本当に頼れる人とは、深いけど、バドミントンの親とか全然深くないです。

Ⅲ—5. 「ママ友がない、いない」

Yさんは、友達もママ友もないとはっきり言っていた。Rさんは子供が通っている保育園の母親同士がママ友であると自認しているものの、その人たちとは連絡先も交換しておらず、会ったとしても世間話や園の行事についての話しをするだけであり、ママ友とは言い難い。

劉：ママ友はいますか？

R：保育園のママとか、連絡取るわけでもないけど、会えば話す程度かな……

劉：大体何人ぐらいこの程度で話できますか？

R：見てれば顔目知りになってるし、話はそこから……何人かな？会えば話す感じなので……

劉：その母親たちと何を話しますか？

R：なんでもない、世間話をしたり、例えば、「寒くなったね」とか、「最近風邪ひいてさ」とか、そういう身近な話が多いかな……深い話はしない。

劉：なぜですか？

R：別に、深い話したいわけでもないから……例えば、行事とか、運動会が近ければ、練習してるねとか、そういう感じはするけど、別に、その程度かな……

Ⅳ. 地域の育児支援

本調査の対象者たちは、個別の人間からの協力だけでなく、地域からの子育て支援も求めている。なぜなら、家族にせよ、友人・ママ友にせよ、子育てに関する専門性を有していないからである。

Ⅳ—1. 「育児支援センターは様々なサポートを提供できる」

家族はアドバイスの内容が古かったり、友人・ママ友はそれまで母親未経験者であったり、不信感が拭えなかったりするなどのデメリットがある一方、地域の育児支援拠点には、時代に合った育児知識を有している経験豊富なスタッフがいる。定期的に開催される育児知識クラス、子育てイベントがあり、子供の遊び場や託児所もある。また、その場で同じ月齢、年齢の子を持つ母親との交流が容易にできるという副次的なメリットもある。

劉：ここは大体どのようなサポートを提供できますか？

R：まず、こういう感じで、親子はゆっくり遊べるし、年齢が近い赤ちゃん同士とか、子供同士は近づけば、お母さん同士コミュニケーション、何ヶ月ですかとか、何歳ですかとか、同じですね。ここから、仲良くなる人もいるし、あと、最初からお友達同士で、一緒に来て遊ぶっていう人もいますね。あとは、心配ことがあって、ちょっとこうどうすればいいですかねとかみたい気軽相談もできます。そういうの対応とか……かな……

Ⅳ—2. 「地域の育児支援センターと交流、意見をもらい、よく利用する、頼れる」

子供が幼いほど、母親は地域の育児支援センターを利用する傾向が強い。彼女たちにとって、助産師や保健士との相談や、子育てセンターのイベントへの参加は、自身の子供の成長具合を知ったり、子育ての知識・技術を身につけたりする機会となっている。親族やママ友に対してよりも深い悩みを相談でき、専門性に基づいた助産師や保健士の意見を聞いた方が安心できる。さらに、他人やインターネットからもたらされた、確信できない情

報を検証する機能も果たしている。

劉：地域の子育て施設とか、子育てセンターはよく利用しますか？

N：結構利用してると思います。

劉：行く時は何を求めていますか？

N：はい、まずわからないことがあれば、一応ネットで調べるんですけど、ちょっと実際の人からの意見を聞きたいなら、行きます。

劉：子育てセンターの先生と相談して、自分の悩みを言いますか？

N：はい。結構悩みがあって、子育て支援センターの方に聞いてもらって、アドバイスをもらって、なんか、納得っていうか……

劉：ヒロロで自分は良く利用したのは何がありますか？

N：ええと、助産師さんと保健士さんの指導、この月齢にあった、ミルクの量とか、なんですかね、あと、生れて一ヶ月の時に自分の子供だけはずっと泣いたり、寝なさたりして、なんか、そういう他の子と違うかなと言う時に、相談とかしたり……

劉：実際のサポートはと気持的なサポートは違いますか？

N：実際のは、やっぱり家族は頼りになってるんですけど、気持的なものとかは、探して、検索って、あとは、家族ではなくて、ママ友でもなくて、助産師さん、保健士さんも意見を聞いた方が、自分も安心ですね。

劉：子供施設とか、子育てセンターとかは良く利用していますか？

H：はい、そうですね。ヒロロのあそこは結構利用してて、一時預かりとかしてもらっています。

劉：あそこを利用する時は何を求めていますか？

H：何だろう。ヒロロ行く時は、大体ベビー広場で、赤ちゃん遊ぶのやり方を教えてもらえたりとか……

劉：ヒロロへ行く時は、何を気になりますか？

H：そうですね。やっぱ、駐車場……車がないと移動できないので、駐車場があるところとあとは、やっぱりあの、そのあそこは助産師さんもいるし、保育士さんもいますので、遊びに行く際に、色々悩んでいることを聞いてもらったりとか、悩んでたこともちょっと、お話聞いてもらったり、知ってもらえるので、とか……

劉：そこのイベントとかは、よく参加しますか？

H：ええと、そうですね。ヒロロのイベントは結構参加しますね。

劉：例えば何を参加していましたか？

H：ええと、赤ちゃんと遊ぶ教室、あとは、手作りでおもちゃを作る教室と離乳食について教室とか……

劉：（一番頼れるのは夫）その次は？

H：その次は、ヒロロのサポートのセンターですね。

劉：近くはどのような子供施設がありますか？

T：うん……ヒロロの方が近いので、子育て支援センターがあって、他にも、みどり保育園とか、おおうら保育園……車で結構移動することは多いので、ちょっと前まで、保育園行ってなかったの、結構そういうところに行って、あの、イベント参加したり、相談もできるので、そこはいいと思います。

劉：ヒロロと保育園などを利用する時は何を求めていますか？

T：保育へ通う前の時は、一時預かりで、託児、預かりしてて、ええと、イベントに行くとか、なんだっけ、ベビー広場って知っていますか？それに参加したんですけど、その月齢の遊び方とかが知れたり、どうやって遊んだらいいかな分からなかったの、そういう遊びをしたり、あと身長体重計ったもらったの、その子供の成長を分かるの、それを求めて行きます。

劉：はい、子供が小さい時も同じですか？

Y：子供が小さかった時は、あの、何だろう、その時は、先、北海道でいたってじゃないですか？北海道にいた時に、児童館とかへ行って……未就学児の方を遊ばせ出たりして、その、ほかのお母さんとかに聞いたりとか、相談したりとか、そういうことが多かったかな。

IV-3. 「他県からの利用者もある」

Rさんは自身も育児を行う母親である一方で、子育て支援センターで働いている。彼女の視点から見ると、利用者は地元の人だけではなく、隣県在住者の場合もある。Aさんも、地元の子供公園が混んでいるため、子供連れて隣県の公園を利用することが多いという。

劉：ヒロロの子育てセンターについては、みんなどうやって知っていますか？

R：ヒロロを知っている理由っていう感じ？ええと、弘前の子も来てるけど、他に近くの弘前じゃない子が多いし、それこそ県外の人でも来てるし、あと青森市とか、八戸市から繰る方もいらっしゃるの、弘前に遊びに来た頃ここで遊ぶ人もいます。

劉：多いですか？

R：多……時期によってかな……

劉：近くは、育児施設はありますか？

A：なんか、何だろう……子供が遊べるところだね。近くはないと思う……かな……共励センターとか、あの、どこがあるか……共励センター内、文化センター内の公園とか……なんかそういう感じで広場っていう広場があるけど……例えば、そこへ行くのに、駐車場代がかかったりとか、としてもそこら辺がすごく密集しやすく……不便……不便っていうかな……結局人が多いけん、じゃあ違う空き場を……県外に行ったり方が多いかな……

劉：県外へ行くのは……そっちよりよいですか？

A：なんか……例えば、佐賀の……三養基郡とかに、あの……故郷の納税のほら、税金とか集まったので、建てたような公園みたいなことがあって、そこはすごく遊具が多かったりとか、その子供のために作られた広い広場だったり、駐車場が広かたり、すごく便利がいいようなところもあったりとか……

すなわち、育児現場の母親たちは、便利性と実用性を考慮し、子育て支援拠点の利用は現住地に限らず、他所も利用している。

IV-4. 「利用する時は心配があっても、信用している」

筆者のフィールドワーク（次節）のフィールドである育児支援センターは一時預かりもでき、母親に頼れる協力者が周囲にいない場合、子供を短時間預ける信用できる場所を提供している。託児所を使用したことがあるHさんは、託児所に対して不安がない。Nさんは、託児所に預けた際、子供が毎回泣いていたことが気になったものの、スタッフの専門性を信用して利用し続けている。

劉：先日のようなおもちゃを作る時は、子供を別の人に預けるのは、何か、心配しますか？
H：あんまり心配しないですね。
劉：なぜですか？
H：へへへへ……うん……大丈夫かな、この前預けたところは……保育士さんは預けてくれるので、何回か預けて、子供もそんなに嫌がる様子もなかったもので……

劉：子供は別の人に預ける時は、不安とかありますか？
N：あります。
劉：大体どのようなことがありますか？
N：泣いてるかな……何回か預ける相手だと安心してはるんですけど、始めて預けるの人だと、やっぱり心配ですね。結構ヒロロの託児所もあるけど、イベントはある時に、そこに一時間、二時間預けて、迎えに行くなら、結構泣いていて……毎回……ちょっと……でも、保育士さんはプロなので、信用はしてるんですけど、何だろう……何ですかね……保育士さんもなんで泣いてもらって気持ちもありますけど、なんか、自分はいない時はどうやって過ごしたことは気になって……心配……

IV-5. 「現在は利用しなくなり、昔は結構使った」

子供が成長するにつれて、子育て支援センターの役割は少なくなっていく。子供が小さいうちは頻繁に利用し役立っていたが、子供がある程度成長してからは、あまり利用しなくなる。保育園・学校に通わせているから、行く時間がない、必要性和感じないなどの理由で、育児支援施設は徐々に利用されなくなる。子供がある程度成長した母親たちは、休日に子供が遊べる場所を求めている。

劉：ありがとうございます。今住んでいる地域は、近くで子育てセンターとか、育児施設とかはありますか？
R：ここです（ヒロロの子育て支援センター）。
劉：よく利用していますか？
R：ええと、ここで働いているので、子供は保育園、あと小学生で、こんなに来ることはないかな。
劉：子供はもっと小さい時は？
R：保育園に入ったので、本当に赤ちゃんの時から働いているので……

劉：住んでいる地域は、子育てに対して、便利だと思いますか？
K：ええと、5年前から住み始めて、息子もちょうど一年生だったんですけど、一年生なので……そこまで……子育てはどう……あまり思わなかった。

劉：子育てセンターとか、組織とかは近くにありますか？
K：あの、子育てセンターは使ったことはないですよ。引っ越した時は、7歳だったので、その前は住んでいたところで、赤ちゃんの時はめっちゃ使っていましたよ。
劉：赤ちゃんの時は、子育てセンターへよく行きましたよね。
K：また、コミュニティセンターも行きました。
劉：そのセンターで大体何をやっていましたか？
K：ええと、赤ちゃんの遊ばせるところがあって、そこで、思い切り子供はハイハイさせて、おもちゃも本もあったので、遊んで……ええと、他のお母さんとしゃべりも楽しかったです。

劉：小学校以外、他の子育ての組織とか、施設とか利用しますか？
K：ううん……してないですね。

劉：地域の医療機関とか、自治体からの協力が多いですか？例えば地域の母親向けの講座とか、相談会とか、集まるイベントとかが多いですか？
S：そういうのは言ってなかったが、小さいときは、小学校前までは、そういうのは活用していましたね。はい、はい。小学校になってからはないですね。
劉：小学校になった前は、大体、どのぐらい一回ですか？多いですか？
S：なに？そういうところに行ってるとか、そういうイベントとか、あああ……どれぐらいだろう……二週間一回とか、ううん……なのかな……ううん……二週間二回とか、はい。

劉：公共施設とかよく利用していますか？
A：ううん！保育園行く前は、やっぱ時間があるので、利用するんですけど保育園へ行きだしてから、あまりそういうところを利用しなくなりました。
劉：利用した時はこの、地域のサポートとか公共施設とかは満足していますか？
A：そうですね。やっぱいろんな方がいらっしゃって……いろんなご知識を教えてくれるので……よく満足はしました。

劉：そっちの方は、遊べる場所を提供するだけ？他のサポートはありますか？
A：あ……その公園？公園は公園だけ、遊べる場所提供のみ。

IV-6. 「子供に相応しい施設が少ない」

対象者のYさんは近年、現住地に移住した。以前住んでいた場所に比べると、現住地の育児施設に対して様々な不満を持っている。

劉：今の居住地、子育てについては、便利だと思いますか？

Y：ええと、前の、前に住んでいたところ、北海道だとすごく良かったけど、弘前はよくない。

劉：はい。特に何が……公共施設が少ないとか？

Y：あ！それもある。公園が少な……まず、水を遊びできる公園が少ない、暑いのに。水を遊びできる公園がないのと後、ううん……市とかやってる教育相談が、北海道はわりと充実してるけど、弘前は皆無とかですかね。後、児童館が、北海道はオープンだけど、弘前は……閉鎖的っていうか、生きづらい感じ……がある。小……保育園地とか、幼稚園地とかが行く場所じゃなく、小学生が行く場所っていう感じ、感覚がある。そういうところかな。

IV-7. 「民間組織をあまり利用しない」

育児支援組織には、公的組織だけではなく、NPO 法人、社会福祉法人などの様々な民間組織もある。しかし、本調査の対象者のなかには、そもそもそのような民間組織を知らない人もいる。

劉：NPO とか民間組織は知っていますか？

N：知ってないです。結構ヒロロにばかり行ってって、地域の子育て支援とか……あとは、1、2 回だけその弘前で、子育て支援もしている保育園のも行ったことがあって、やっぱ、そこはヒロロより自宅から遠いので、やっぱ近いところがヒロロかなと思って……

現住地にある育児支援 NPO 法人について知っている対象者は何人かいたが、実際に利用したことがあるのは T さんだけである。

劉：ヒロロ以外の民間組織、NPO などの子育てサポートが知っていますか？

H：何があるのは知ってないですけど、あるのは知っています。

劉：ヒロロ以外は、別のサポート組織とか利用していますか？

R：特にないです。

劉：他の NPO とか、民間組織とかは？

T：ええと、あの、こももサポート知っていますか？あの、母子手帳をもらえて行った時に、ヒロロの保健士さんから紹介してもらって、周りに私が親がいないので、そういうのもありますよも紹介されて、こももを 5 回ぐらいで使いました。そういうのを紹介されて、その民間の、利用したことがあります。

劉：ええと、そこはどのようなサポートがありますか？

T：ご飯を作ってもらうの願いしました。週一回、3 日分ぐらいで作ってくれるのです。それで、最初産後料理つくたりとかは大変と思ったので、それ以外は全部夫にやってもらって、ご飯は、そのこももさんお願いした。

V. 教育教養施設の利用

対象者のなかには、1 歳未満の乳児を持っている者が 2 人いる。他の対象者の子供たち

は保育園生、小学生である。Kさんの子供は小学校以外では、休日にバドミントンと算盤も習っている。

劉：休日なら、何をやりますか？

K：子供はバドミントンを習っていて、その休日行ったりとか……かな……

劉：子供はやりたいですか？お母さんはやらせたいの？

K：バドミントンは自分からでした。

劉：ネット上で子供は何をやるべきとか、この年だから、これを学ぶべきとか、そういうような情報を探しますか？

K：小学校一年生の時は、ちょっと何やらせればいいかなと思って。ええと、探して、算盤で計算を身につけるのはいいこともネットで出て来たし、友だちから勧められたので、はじめて利用しますね。

V-1. 小学校—「小学校からのサポートはほとんどない、要らない」

子供たちは、義務教育を受ける年齢に達すると小学校に通い始める。Sさん、Yさん、Kさんそれぞれの子供たちは、現在小学生である。

劉：今は、お子様も小学生ですよね。

S：はい。そうですね、小学。6年ですね。

劉：ううん……今は小学生？

Y：小学生、二人とも小学生です。

学校にいる時間は昼間の大部分を占めている。しかし、Yさんの語りによって、育児に関する小学校からの協力はほとんどないことが分かる。

劉：小学校の先生たちからのサポートが多いですか？

Y：サポートっていう感じで、ないですよ。

とはいうものの、子供が学校にいる時間、母親は仕事や、自身のことに時間を割くことができる。また、小学校に通う年齢になった子供たちは、ある程度の自立ができており、放課後に友達と遊びに行ったり、ゲームをしたりするようになる。それ故、母親は、以前ほど面倒を見なくてもいいようになる。

劉：子供は放課後、他の子供の友達とか、一緒に遊んでいくことがありますか？

K：あります……うん。

劉：子供は放課後、一緒に何をやりますか？

K：子供は自分でゲームしたり、YouTube 見たりするので、一緒に遊ぶことはないです。食事ぐらい……

しかし、小学生の母親たちは、育児についての心配事が全くなかったというわけではない。上述の内容の通り、小学生の母親たちも様々なサポートを求めている。

V-2. 保育園—「保育園の先生は頼れる、制限がある」

保育園に通っている子供たちは、相対的に稚い子供である。そのため、母親の育児に関する悩み相談の需要が多い。親族、ママ友、友人に比べて、保育園の先生は子供との日常的な接触時間が長く、子供の性格や癖などをよく知っている。地方の育児支援センターなどは、わざわざ出向く必要があり、日常的な悩みについて直ぐに答えてもらえない。そして、保育園の先生たちは育児のエキスパートであり、時代に即しており、その子に相応しい答えをくれる。母親たちに対して、保育園も育児の情報源になっている。

劉：2人とも働いている時は、子供はどうしますか？

A：保育園。

劉：やっぱり保育園の方からのサポートが多いですね。

A：はい、そうですね。

劉：悩みとかは、ほとんど誰と相談しますか？

A：保育園の先生だったり……あと、そういう専門の先生……言語訓練とかいうの教えられる先生とかにちょっとこういう風に出てきてるです……とか、そうしたらいいですかねとか……相談する。

劉：情緒的なサポートは？相談をしたりなんか、助言したりする人は？

A：うん！ママ友もそうですけど……やっぱ母親だったりとか保育園の先生、保育園の先生の方がやっぱ、自分、私より長く子供と接触している時間長いので、やっぱ先生に子ちょっとこういう風に言って相談する事はありますね。

劉：保育園の先生からもその経験が、ちょっと古いかと思いますか？と考えていますか？

A：保育園の先生はやっぱ、その分ずっとされてるので、時代のニーズに合った……答えを出してくれる時はありますね。

劉：身近な育児サポートをもらえるのは親？

R：あの、やっぱ、保育園はメインだから、保育園の先生が面識してくれるし……

劉：（悩み相談できる）そういう友達は何人いますか？

R：4、5人いるかな、あとは、職場の仲がいい人に話したり、子供の話だったら、保育園の先生に……保育園はどうとか……っていう話ができるし、ええと、そんなに悩みはないです。

劉：子供に関することは、自分ではできますから……

R：あとは、学校の先生とか、保育園の先生とか、やっぱ普段見てるとか、家でこうだよ、じゃあこうしようかみたいな話ができるから……そんなに困らないかも。

劉：サポートを求めている時は、職場の同僚と、保育園の先生はどっちが一番頼れそうですか？

R：種類が違う。自分が求めているサポートの種類が……うん……本当に子供に関するこういう時でどうするだろうとかっていうのは保育園にかな、知ってる先生が知ってるから。いつも私の子を見てるから、どういう性格が知っているから、その話しなら保育園の先生……

劉：仕事の時間は子供はどうしますか？

T：保育園に預けてます。

劉：今は、どこで子育て情報を知っていますか？

T：うん……本、基本の本見たり、離乳食はアプリで見たり……保育園に預けているので、保育園でどういう風にしてましたかを頼りとか、毎日もらうので、こういう絵本を呼んでましたとか、こういう好きなかなみたいな、家で見やってみようと思ったりとか…

また、24時間営業や休日も営業している保育園もあり、用事がある時、共働き家庭の母親や、働いている母親たちに役立っている。

劉：子供は3人がいて、1人は対応できない場合は……

R：保育園へ行っている間に、自分の時間が持っているので、その時で用事ができるので……

劉：保育園、土曜日も行けます？

A：土曜日もあってます。が……うん。だから、基本的に土曜日が預けない。私の場合は、仕事がないから、土曜日は通常休み。

劉：お子様が小さい時は、保育園とか、先生からのサポートがありましたか？

Y：サポート……そうだな、ええと……の……幼稚園の上の子が、年上3になってから弘前に来て、……多分……あの……共働きが多い家庭が……何だろう……共働きが多い地域だから、預かり保育っていうのをやってて、それも結構低料金で……やってるのは、そこは良かったと思う。そのサポートはいい、よかったです。

劉：保育の時間はなって、仕事は終わらない場合はどうしますか？

T：24時間の保育園なので……なので……仕事のことも考えて、そういう保育園にしたので、今のところは大丈夫かなと思っています。

しかし、保育園からの協力は、保育園のなかのことにのみ限定され、家庭でのことなどについては先生たちに話せない母親もいる。子供が保育園に行っていない時は、自分や他の協力者と共に子育てしている。

劉：保育園の先生はどのような立場ですか？

A：保育園の先生は……保育園のみ……って感じ。いろんな先生がいるけれど、こう……あんまり家のことはどうですか、こうですかという風に聞かれない。ただ、保育園でこうした……保育園のみのこと……かな。

母親は様々な意見を聞いたり、見学したり、ホームページを見たりして何ヶ所もの保育園のなかから自身の子供を通わせる保育園を選んだ。保育園の雰囲気が高く、子供に異常が見られないため、その保育園を信用している。

劉：じゃあ、今の保育園はどうやって決めましたか？
R：近所、家の近くとか、あとは、家の近くの保育園を考えて、あと、そういうあるんだなって、直接お話聞きに行ったりとかして、ここはいいかも……そういう感じかな。
劉：他の人たちからの意見やアドバイスを聞きましたか？
R：そこまで一生懸命、評判などを聞きに行くのはしない。
劉：今は子供たちは保育園に預かりしてるから、そこに何の心配とかはありますか？
R：特にない。
劉：なぜですか？
R：保育園の雰囲気がいいかな。なんか、質問にしにくいなどもないで、気楽に、こっちも話しやすいし、あっちの方、気軽に話してくれるから……子供たちも元気出してるし、楽しく行けるから……そうだね……雰囲気がいいかな。

劉：その保育園はどうやって決めましたか？
T：見学して、説明聞いて、ですね。
劉：保育園を探すときは、色々比較をしましたか？
T：ええと、家の近くの4ヶ所行って、それで今の保育園はいいなと決めました。ネットであの、保育園のページを見ました。
劉：そのページで、別人のコメントなどはありますか？
T：こういう風に生活してますよこの保育園はとか……そういう紹介のページですね。
劉：他の人の意見を聞きましたか？
T：聞きました。職場の子育てする母親たちに、どこの保育園した、なんでここにしたとか聞いて、参考にしました。

しかし、保育園に対して不安を抱く母親もいる。例えば、Aさんは子供の人間関係を心配している。Tさんの場合は、保育園自体に不安はないが、迎え行くのが遅いことを子供に対して申し訳ないと感じている。

劉：子供は保育園へ行く時は、自分は何が不安とかありますか？
A：うん……先生も人間だし、やっぱその人間関係も合う、合わないこともあるし、子供が家と保育園では、やっぱ違うのかなと思う時に、保育園でどんな風になっているかな……保育園の中、集団行動しているの子供をどうなん感じなのかを気になったりことはする。

劉：今子供は、保育園に預けるけど、これに対して心配とかはありますか？
T：今行ってる保育園は、見学させもらって、すっごくいいなと思って、預けたことなので、保育園自体は、不安はないですけど、ええと、仕事は遅くなって、あの5時とか6時とかに迎えに行くので、子供にとって負担にならっていう負担があります。

3-3-2. 家族内外における育児ネットワーク

ここで、コミュニティ問題に関して提案された都市社会学の3つの学説、「喪失論」「存続論」「解放論」を引用し、インタビュー調査の内容を分析する。喪失論は、社会における分業体制がコミュニティの連帯を衰弱させてきたと主張する。存続論は、近隣や親族関

係の連帯は産業的・官僚的社会システムにおいても依然として力強く繁茂していると主張する。そして解放論には、第一次的紐帯がいたるところに存在しており、その重要性を失ってはいないものの、現在は密に編まれ、しっかり境界づけられた連帯というかたちで組織されることはなくなっているという主張がある（ウェルマン、1979）。

本調査のインタビューデータの分析から、子育ての協力者は家庭内部の者と家庭外部の者に分けれる。シングルマザーの場合、家庭内部の協力者は同居の祖父母に限られるか、むしろいない場合もある。夫婦世帯であれば、協力者は夫に限られる。つまり、近代以前の大家族に比べ、現在の家庭内部に形成されている育児ネットワークは、喪失論をある程度支持している。さらに本調査から、対象者の母親たちには近隣住民など家庭外部の協力者がいないことが明らかとなり、喪失論の支持を裏付けている。現在の母親たちの家庭外部の育児ネットワークは、別居の親族、友人、同僚、ママ友、育児支援組織など様々な協力者から構成されている。移動により実家から出たとしても、別居の親族から様々な協力を得ることができる。そして母親たちは、移動先で新たな育児ネットワークを形成し、新たな協力者を獲得する。育児ネットワークは都市化の進行によって密に編まれなく、解放していると考えられる。

母親の子育てにとって、育児ネットワーク上の協力者の豊富さは大事な育児資源である。しかし、その協力者たちが提供できるサポートの量や種類には、差異が存在している。以下では、家庭内外の協力者がそれぞれどんなサポートを提供できるのかを分析する。

3-3-2-1. 同居者の協力

I. 同居者がいるシングルマザー

乳児や幼い子供を1人にすることは危険を伴うため、大人が近くにいるケアをする必要がある。ある程度自分の安全を守ることができる年齢に達した子供も、子育てが全く要らなくなるわけではない。そのため、子育ては母親1人では万全ではなく、子供が幼いほど協力者を求める傾向が強くなる。また、本調査のインタビューから、母親たちにとって夫は共に子育てを担う仲間として機能していることが分かるが、育児中の母親たちすべてに夫がいるわけではない。

未婚、離別、死別など様々な理由でシングルマザーになり、母子家庭、母子世帯のような夫がいない育児中の女性の家庭も少なくない。本調査の対象者では、シングルマザーのうち2人（A.Y）は親同居ひとり親世帯であり、もう2人（K.R）は子供のみと一緒に住んでいるひとり親世帯である。

そして、同居者がいるシングルマザーにとっては、両親（祖父母）など他の同居者が、夫に替わる頼れる育児協力者であるものの、その度合いは対象者により差異がある。例えば、自分の親（祖父母）と一緒に暮らしているYさんは、仕事が夕方からであるため、小学生の子供たちと一緒にいる時間はきわめて少ない。子供たちは、祖父母と一緒にいる時間がより長く、子供の面倒は主に祖父母が見ている。また、祖父母は育児についての悩みの相談の相手でもあり、Yさんの育児に対して、実地的なサポートも情緒的なサポートも協力してくれる存在である。それに対して、自分の母親（祖母）と一緒に暮らしているAさんの場合は、祖母も働いているため、子供の出迎え、家事の手伝いなど実地的なサポートはほとんど受けられないが、一緒に暮らしているため、納得できるアドバイスを与えてくれる者、悩み相談の相手などとして祖母は協力者となっている。すなわち、同居者からの実地的なサポートは、家庭によって差異が存在している。しかし、その度合いに程度が

あるにせよ、同居者は育児の相談相手になることが可能であり、精神的なスポンサーになってくる。

しかし、子供のみと一緒に暮らしているシングルマザーの場合、すべての家庭内部の家事・育児は自分で行わなければならない、現実的なサポートも情緒的なサポートも家庭内部から受けることができない。母親自身の努力以上に、家庭外部からサポートしてくれる協力者が必要である。

II. 夫婦世帯

シングルマザーと比べ、夫と一緒に暮らしている女性の場合は、夫が力強い協力者となっている。本調査の対象者のうち、夫がいる者は全て夫婦世帯であり、祖父母と同居している夫婦は1組もない。すなわち、家庭内部の協力者は夫に限られる。また、日常的な夫からのサポートは、夫婦が一緒にいる時間のものがほとんどであり、夫1人に育児を任せられるのは、短時間の外出時や手が回らない時に限られている。

このように夫は、比較的なんでも相談できる相手としては頼れるものの、帰宅時間が不安定、出張が多いなどの原因から、子供の面倒を見たり、家事に協力したりすることはあまり多くないことがインタビューで判明した。そして、彼女たちの語りから、夫は育児の愚痴をこぼしたり悩みを相談したりする相手として頼れる者ではあるものの、対象者たちの夫たちは育児未経験者のため、実際には有効なアドバイスや情報を得られない。子供が大好きな夫の場合、主体的に様々な育児をしているが、夫婦2人きりの力では解決できないことが存在する。また子供好きの夫であっても、ほとんどの者が平日の帰宅時間が遅いため、育児について協力できることは限定されている。つまり、夫は日常に現実的なサポートをしているが、「家」にいる時間が女性より少ないため、彼らが可能なサポートは母親にとって足りないと言える。だが、夫は現時点で最も親密な関係を持つ相手であり、精神的には大きなサポートをしてくれる存在である。

インタビュー内容から、女性の高学歴化や社会進出に伴い夫婦役割分業が曖昧になっている現在であっても、母親はまだまだ子育ての主役であることが判明した。父親は子育ての自覚がないというわけではないが、実際の子育てでは手助け程度である。こうして家庭内の育児協力者が少ない現状では、母親にとって日常的に家庭外部からの協力者が必要であると考えられる。

家庭内の協力者が2人以上である場合はほとんどなく、同居の祖父母や夫に限定されているため、家庭内部の育児ネットワークは喪失している。

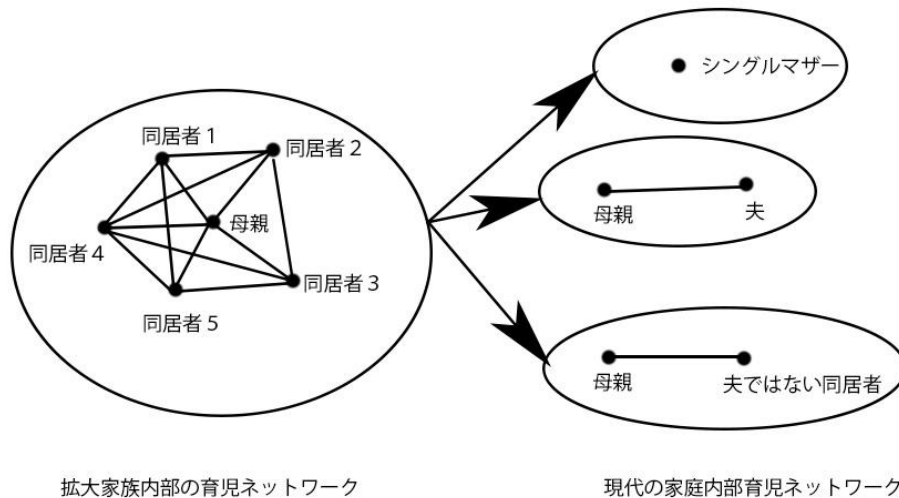


図1 家庭内部の育児ネットワークの変化

注： 人は点で示され、関係は線で表している。
強い関係にある同士は実線で、関係は強いほど線が太い。
弱い関係にある同士は破線で結んである。（同下）

3-3-2-2. 別居者の協力

I. 別居中の家族からの協力

対象者たちの語りから、同居者がいる場合、それぞれ程度に差はあれども、その同居者から实际的なサポートや精神的なサポートを得られている。特に夫婦世帯では、「夫が一番頼れる」と明言した女性がいる。だとしても、家庭内部の緊密な関係だけでは、育児はうまく行かないことが想像できる。

まず、大人の同居者がいないシングルマザーの場合、「家」の中では、子供たちが簡単な家事手伝いをしてくれるが、それ以上は難しい。その協力の程度は、母親に、家庭内の協力者が全くいないのとはほぼ等しいと言える。故に、家庭外部から自分の「家」に出入りや、相手の「家」に自由に出入りができる者の協力は必要となる。

例えば、Kさんの場合、子供が小学生で、出張が多かった時、遠くに住んでいる祖母に子供の面倒を見に東京に来てもらった。インタビュー中「ほとんど悩まない」と何度も口にしていたRさんも、子供関係の仕事に従事しつつ、基本的には1人で子供たちの世話をしている。しかし、子供たちは日常的に保育園に通ったり、いざという時には実家に預けたりすることもあるため、育児を完全に1人でやっているとは言えない。

そして、夫婦世帯の母親たちも、実家や他の家族からの協力がある。さほど遠くない実家に戻って親に洗濯や料理をしてもらったり、逆に義父母が「家」に来て掃除をしてもらったりすることがある。インタビューから、夫婦世帯の対象者たちの共通点は、実家の祖父母に求めるサポートは实际的な協力に限定されていることである。「意見が古いです」「近くにいないから、聞いてもうまく行きません」「助言を求めないです」「祖母の育児は何

年前のことですから……」など理由から、祖父母の育児に関するアドバイスや経験譚などをほとんど聞きたくないという。実家に子育てに関する意見を聞くことがあったとしても、それは家族行事やお祝いの方法など文化行事に関するものに限られ、実家との適度な関係維持のついでで育児についての話をしているに過ぎないと考えられる。要するに、実家の祖父母は実際的なサポートは出来るものの、精神的なサポートの提供者としてはあまり役に立っていない。

しかしHさんは、同じ月齢の乳児を持つ別居の姉と頻繁に育児の不安を共有したり、情報交換したりしている。Hさんの姉とHさんは血縁関係があり、幼い頃から親密な関係を持っている。Hさんも姉もこれまで育児経験はないが、お互い気軽に育児についての相談ができる。そのため、姉は重要な精神的なスポンサーとなっている。同齢の子供を持つ親族は育児ネットワークの一端となることは可能であろう。

II. 親しい友人・仲がいい同僚の協力

育児の協力者は、家族成員に限らず、血縁関係以外の親しい者も協力者になることが可能である。家庭外部者のなかでは、昔から付き合いがある友人や、常に接触がある仲がよい同僚などが、何らかの育児支援ネットワークの成員となることができるだろう。インタビューにより、対象者たちは家族メンバーからの協力の程度に関わらず、家庭外部者と育児の協力関係を持っていることが明らかになった。特に、シングルマザーや、実家が遠隔地にある対象者たちにとって、友人は「家」の外の有力な育児協力者である。

特に親しい関係の友人を持つ対象者のなかでも、友人宅に子供を遊びに行かせたり、泊まらせたりしているのは、Kさん1人だけである。他の対象者たちは、友人や仲がいい同僚とは育児情報の交換や、子育てのアドバイスを得るなどに留まり、お互いの「家」に入るような付き合いはほとんどない。つまり、友人、仲がいい同僚の多くは、相談役を果たしているものの、実際的な協力をするのは難しい。

そして、Aさんの語りから、昔からの友人との付き合いを継続されていて、お互いの関係を維持していても、相手に子供がいない場合は、子供の話しを出すことはない。子供がいる友人と一緒に遊びに行く場合は、育児情報の交換や育児の悩みの相談をするというより、子供たちを合わせて遊ばせることが目的であることが多い。すなわち、親しい友人や仲がいい同僚は、精神的なサポートを提供してくれるが、相手の状況によって様々な制限があると言える。

III. ママ友との関係は子供が幼い頃に限定される

血縁関係者や昔から付き合いがある人々と形成されたネットワーク以外にも、子育て中は特有な関係ネットワークを形成することが可能である。共通の利益や趣味などに基づいて人々が集まると同様に、出産がきっかけとなり、ママ友のコミュニティが形成されることは珍しくない。対象者たちにとってのママ友には、以前は話さなかった同僚と出産を機に話すようになった、同じ育児支援センターを利用してるため付き合いが始まったなどの例がある。また、妊婦のサイト、インターネット上のコミュニティで交流が始まり、仲がよくなるケースもある。

育児の協力がきっかけで、付き合いが始まったママ友から親しい友人になった例として、信頼関係がより深まりお互いを家に入れたり、自分や家族についてのプライベートなことも話したりするようになるケースもあった。しかし、一般的なママ友との付き合いは「家」の外で、軽い相談しかできない場合がほとんどである。

まず、ママ友と一緒にイベント行ったり、外で遊んだり、子供についての話しをしたり

することがあるが、「家」の領域に立ち入るのは困難であり、「家」の外でお互いに子供預けることもほとんどない。また、対象者たちは、時間や感情をママ友に投資する必要性を感じておらず、話題も「病院」「離乳食」「お祝い」「行事の準備」など表面的なものが多い。ママ友間や子供間のいじめ、ママ友との人間関係の悩みに発展しないように、本当の悩みはママ友には言わず、深い関係にならないように距離を取って付き合っている。さらに、ママ友はほとんど育児の素人であり、育児の専門性を有していない。育児経験があるママ友であったとしても、アドバイスを容易に受け入れない対象者もいる。本当の悩みはママ友より、医者、育児の専門家に意見を求める傾向がある。

次に、ママ友は子供が未就学児の時期の限定的なサポーターと言える。子供が成長するに従って、母親は復職し、子供は通学が始まるため、育児イベントへは足を運ばなくなる。そして、子供との過ごす時間が増すにつれ、自分の子供の性格や特徴が分かってくるため、育児の悩みも減少し、ママ友との関係維持の必要性を感じなくなる。連絡が続いたとしても、「元気ですか？」等の世間話に留まる。ママ友との関係は表層的なところで留まる場合がほとんどであるが、「家」の外で地域の育児問題についての情報を入手するネットワークとして機能している。

IV. 地域の育児支援組織の利用

IV-1. 未就学児の場合

子育てが縁となって構築されるのは、個人間のネットワークだけではない。対象者たちは、母子手帳交付時に居住する市町村の窓口で紹介されたり、自分で調べたりして、地域の育児支援センターや育児関係のNPO、子供向けの公園などを利用し始める。そのような施設や団体の一部は、保育士や保健師などの専門有資格者を配置し、育児に関する知識や技術を学ぶイベントを開催しており、育児支援ネットワークの一端としての期待が高まっている。育児については、絶対的な「正解」はないかもしれないが、専門スタッフを有する育児支援組織は、家族、友人、ママ友といった他の育児支援者よりも専門性があると言える。また、知識を得たり悩みを相談したりする以外に、他所から得た情報が正しいものかどうかを確認することもできる。専門性の故、地域の育児支援組織は育児のなかで大切な役割を果たしている。例えば、託児所を利用しているNさんの語りからは、毎回子供が泣き出すため心配ではあるものの、育児のプロである託児所のスタッフを信用していることが分かる。つまり、家族、友人、ママ友といった他の育児支援者とは、個人的な交際の積み重ねによって信頼関係を構築していくが、地域の育児支援組織に対してはその専門性こそが信用の理由となっている。

育児支援組織のスタッフたちは、対象者にとって信頼できる協力者となり、イライラの気持ちを緩和させるなど精神的なサポートを担っている一方で、一時預かり、短時間保育、食事の提供などのサービスもしており、ある程度「家」の外的なサポートも提供できる。

しかし、ママ友との付き合いと同様に、育児支援組織の利用も子供が幼い時期に限定されている。幼稚園や小学校への通学が始まり、ある程度自立しはじめた子どもの母親は、育児支援センターのサービスを利用しなくなる。サービスを利用する時間もなくなってくるし、それらサービスのほとんどは幼い子供向けであるからである。母親たちは、支援してくれる場所より、子供を遊ばせておける場所や、暇をつぶせる場所を求めている。

IV-2. 教育・教養施設の育児協力

本調査の対象者の中で、育児休暇を取っている母親（H.N）以外は、正社員であれ、臨

時社員であれ、アルバイトであれ何かしらの仕事をしている。働く母親たちの子供は、日中は保育園や小学校に通っている。保育園や小学校にいる時間は、先生が母親の代わりに子供の世話や教育をし、子供も集団行動の技を身につけていく。この機能は、他の協力者にはない特有のものである。

そして、先生たちは専門家としての資格を有しており、子供と接触時間は、他の協力者より長いと言える。先生たちは対象者の子供たちの性格もよく把握しており、これまで様々な子供たちと接触してきたため経験も豊富である。保育園児の母親は、よく先生と話したり、悩みを相談している。それによって母親たちは、自分の子供の園内での状況を知ることができる。保育園の先生から、園での子供の様子や、好きな絵本などの情報を教えてもらうことで、母親たちは精神的な負担減らすことができる。

小学生の子供を持つ母親たちは、小学校からの協力はほとんどないと語っていた。しかし、母親本人が気づいていないだけかもしれない。なぜなら、子供は昼間の大部分を学校で過ごし、そのあいだ、教員たちは子供たちの世話と教育をしている。母親はその時間で、仕事や自由時間を持つことが可能になる。つまり、教育教養施設からの精神的な協力は子供の成長に従って減少していくものの、実際的なサポートはほとんど変わらない。

要するに、家庭内部の協力者は近代以前に比べて減少傾向にあるものの、家庭外部では親族、友人、育児支援組織など様々な個人や団体が育児ネットワークを形成しており、その紐帯の強さには差があるとしても、これらの家庭外部の支援ネットワークは広がっているといえる。

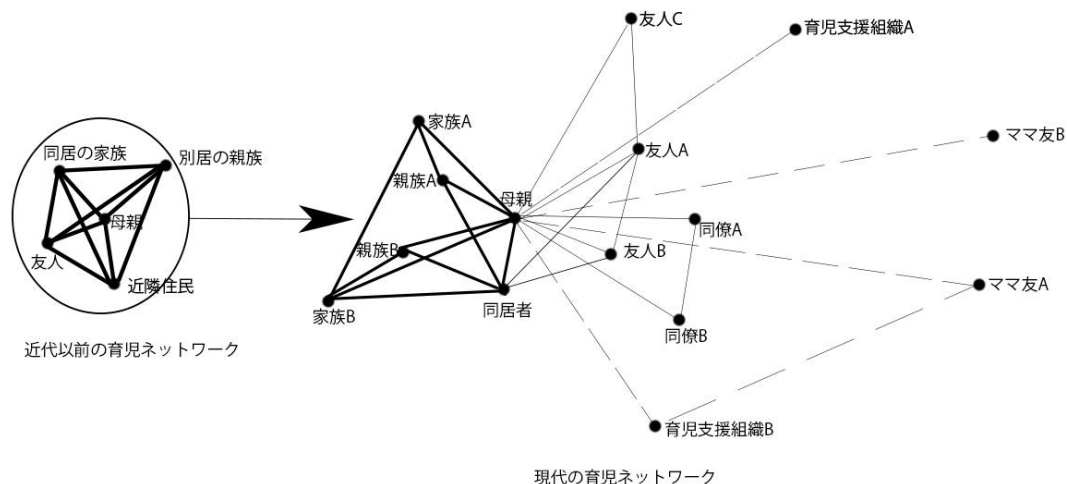


図2 育児ネットワーク全体の変化

3-3-3. 育児の情報収集

先に引用した対象者たちの語りから、育児協力者は、対象者に協力するだけでなく、対象者に育児情報を伝えたり、交換したり、検証したりすることもできる。母親たちは、実際的かつ精神的な協力を求める以外に、彼ら彼女らから育児の知識・技術、子供のしつけ方法、質が良い保育園、小学校に入る前の準備など、様々な情報を収集している。インタビュー調査から、対象者たちの育児情報の情報源は、主に身近な育児協力者とインターネットに集中していることが分かる。

表 5. 子育て中の情報源となる可能な対象

対象者	身近な情報源			マス・メディアの情報源	
	同居者	別居者	地域の育児支援組織・学校	インターネット以外	インターネット
R さん	×	△	△	×	×
K さん	×	○→△	○→×	△→×	○
Y さん	△	×	○→×	△→×	△→×
N さん	△	△	○	△→×	○
H さん	△	△	○	△→×	○
S さん	○	△	○→×	×	○
T さん	○	○	○	△→×	○
A さん	○	△	○	○	○

できない——× まあまあできる——△ できる——○

3-3-3-1. 身近の情報収集

これまでのインタビュー調査から、育児中の女性は、家族の内外に関わらず、様々な協力者がいることが明らかになった。特に、身近な家族、友人、ママ友、子育て支援組織、教育教養施設のスタッフなどと育児に関する話しをし、情報を得ていることから、その人たちは育児の情報源になっていると言える。育児中の女性にとって、その人たちや組織から得られる情報は、大切な情報資源であると考えられる。

I. 同居者—「同居中の家族は情報源となる」

一般的には、育児中の母親は、同居する家族メンバーと最も親密な関係を持ち、日常的な接触を通じて相互に信頼関係を構築しており、ほとんどすべてのことを相談できる。育児に関する話題についても、母親は常に側にいる夫や同居の祖父母に相談している。例えば T さんの夫は、自主的に育児に関する情報を収集し、T さんと相談する。また A さんは、祖母が A さん自身の性格をよく知っていると考えているため、祖母からの育児情報は古いと思いつつも、その中から自身にとって適用なアドバイスはある程度取捨選択し、納得している。同居者は、母親にとって重要な精神的なサポートを提供する以外にも、育児情報の情報源として機能していることが分かる。

II. 別居者—「別居中の家族、ママ友からの情報はあまり重視しない」

別居中の家族から得られる育児情報については、母親たちはある程度納得しており、特に家族間の伝統行事や育児に関する知恵は、ある程度家族の世代間で伝承されている。しかし、実家の家族と別居している母親たちは、祖父母と物理的な距離があり、お互いに接触が少ないため、時代に求められる母親像が乖離しており、世代間の育児価値観に差異が存在している。また、調査対象者たちのなかには、特に祖父母からのアドバイスに対して、「意見が古い」「現在の価値観と相応しくない」「そもそも聞きたくない」などと言及した者がいた。そのような対象者たちは、別居中の親族の意見をあまり重視しないと考えられる。しかし、なかには例外もある。S さんは、昔の人の経験は現在でも価値があるものと信じて、大事に扱っている。

劉：なんか身近な人からのサポートとか、意見とかちょっと古いと思いますか？

S：あああ……その部分ですね。で、どうだろう。でも、昔からあるものに対して、っていうのも大事にしていけないといけない部分もあるし、新しい情報は情報で、そこは、まあ、多少で……行くべきかなあとも思っているんで……でも、基本は、やっぱりこう……うん、昔からのこそ、重要なかなと感じますね。

Sさんにとっては、血縁関係が最も信用できる親密関係であり、血縁者から得る情報が大事であると考えられる。しかし、一般的には、進学、就職、結婚の際に、地元から他所へ移動し、生活環境も変化する。このような変化から、実家の家族成員との接触が減少する母親も少なくない。別居の祖父母、兄弟などの家族メンバーは、常に育児中の女性や、その子供たちの近くににいるのは難しい。確かに、電話やインターネット上のコミュニケーションはある程度存続しているが、常時的な接触があるわけではないため、実家を離れた後の性格や、子供たちの性格をはっきり知っておらず、両者の生活環境には差異が存在していると考えられる。家族成員間の信頼関係はなくなるものの、物理的な距離がある場合、別居中の親族は有効な情報源になるのは難しい。世代間の価値観の差異と、物理的な距離によって、納得できるアドバイスはあまり得られなく、得られたとしても表面的なものに留まっている。ただ、Hさんのような同世代の姉に同齡の乳児がいる場合、別居の親族であっても、お互いにとっての情報源になることができる。

別居の親族の代わりに、家族部外者の友人、ママ友、地方の育児支援センター、保育園の先生なども、母親に対して育児の情報源となることができる。特に、同世代の友人や、ママ友は、別居中の家族に比べて育児に関する価値観が合致している。その人たちとの交流においては、現在の母親たちが求めている新しい育児知識、技術などとの接触可能性が高いと考えられる。例えば、Tさんにとって友人から教えてもらった育児情報は頼りになるものである。しかし、すべての親しい友人が育児上の情報源になるわけではない。子供がいなく、育児経験のない友人の場合、必然的にその人から育児に関する情報を得ることはできない。また多くの場合、同齡の子供を持っているママ友とは距離感を感じており、深い関係を持つことは少ない。ママ友との育児情報交換は、「七五三祝い」「入学式準備」「学校の行事」など表面的な話しに留まっている。

Ⅲ. 「個人的な協力者は団体的な協力者より情報源とならない」

個人的な協力者以外には、育児支援組織が存在している。育児支援組織のスタッフたちは専門性を有するため、母親たちに対して、実際のサポート、精神的なサポートの両面で重要な役割を果たしている。専門知識を持ったスタッフからもたらされる育児情報への母親たちの期待は高い。地域の子育て支援組織のスタッフたち、保育園の先生たちは育児の専門家であるため、科学的な育児知識に基づいた、経験的なアドバイスをすることができる。彼ら、彼女らは長年子供たちと接触し、豊富な情報を持っているがゆえに、信頼度が高い。

劉：専門家の方と SNS との交流する人、素人、あらゆる同じ母親の方は、どちらの意見を聞きたいですか？

S：聞きたいか？でも、どうだろう。市の方かな、市の方ですね。

祖父母と同居か別居かを問わず、地域の育児支援者と保育園の先生は専門知識を持つゆえに、母親にとって信頼できる情報源となると考えられる。

3-3-3-2. マス・メディア上の情報収集

現在はメディア時代であり、母親たちは現実空間で接触がある人や組織から情報をもらう以外に、マス・メディアやインターネットを利用している。現実空間でサポートを提供する者たちは家族であっても、絶え間なく育児中の女性の側にはいないので、常にリアルタイムで育児相談に答えることはできない。しかし、インターネットからの情報は、迅速性と即時性が保障されている。さらに、メディアの発展によって、新たな時代にふさわしい科学的に裏付けられた情報や価値観が溢れている。そして、現在の母親たちの価値観は変化し、昔から伝わるあまり科学的とは言えない知識を信頼できない可能性もある。

I. 「本、雑誌やテレビなどは見ても多くない」

育児に関する知識は、子供になにかあった時のみで必要となるものではない。育児に関する日常的な知識の貯蓄は妊娠中、むしろ妊娠前からはじまる。雑誌や本、テレビなどは、育児に関する知らないことや知りたいことを日常的に女性の頭に浸透させていく。特に、出産未経験の母親にとって、母親向けの雑誌、育児本や育児に関するテレビ番組などは第一子が生まれた時や子供が幼い頃に重要な役割を果たしている。例えば、マス・メディアを利用しているAさんは、雑誌や育児本を利用する際には、子供の成長や行動などについての情報を収集し、頭に入れて置くという。これら情報は、具体的な育児支援者と相談した上で採用するかどうかを判断する。

劉：マス・メディア、テレビ、雑誌とか、育児本とかはから育児情報はもらえますか？
A：もらえます。やっぱ、すっごく利用しています。私の場合は、信用って言うよりちょっとしたその、頭の片隅に入れておく知識として、やっぱ子供がこういうことをしていると、どうなるかなって言うことを調べて、まあ、そういうのを見て踏まえた上で、他の人をこうと相談するしたり、専門の人と相談すると言うのがありますね。

しかし雑誌などに載っている例は、ほとんど一般的な育児の見本に終始しているため、母親の多様な育児需求に対応できない。そして育児現場の母親たちは、長時間落ち着いて本や雑誌、テレビを見ている暇がない。同じような育児内容を書いた本や雑誌が、様々な出版社から刊行され、それらを購読するにも最低限のお金がかかるため、選択自体も困ることになる。そして、テレビ番組の放送時間は限定されており、母親の集中力を奪う可能性が高いデメリットもある。母親自身が見るのではなく、Hさんのように子供を静かにさせたい時に子供に見せてあげるという育児テレビの利用ケースもある。

劉：マス・メディアの育児本とか、雑誌とか、なんか、よく利用していますか？
S：あまりしないかな。

劉：はい。ネット以外のマス・メディアはよく利用していますか？テレビ、本、雑誌とか……
N：雑誌は買ってました。テレビもあんまり……子育てに関することはあんまり見ない……ので……

劉：他のメディアを利用することがありますか？

R：あまりないですね

劉：マス・メディアの利用は多いですか？

H：そうですね。テレビ……

劉：育児本は？

H：育児本はなかなか見ないですね。

劉：テレビは大体どのような番組がありますか？

H：テレビ……育児関係のテレビはそんなに見ないですね。ちょっと、時々、子供から眼を放せたい時、見てくださいという感じです。

劉：なぜ、本とか、雑誌とか読まないですか？

H：なかなか、集中して本を見たり時間は取れないです。あと、買いに行くのは難しいのと、本も本でいっぱい並んでいるので、同じ物を書いてある本はいっぱいあって、どれがいいかなとか分からなくて、悩んで……いかなみたいな感じ買わない。

さらに、子供の成長に従って、母親たちは、自分の子供の性格を分かってきており、子供たちもある程度自立してきている。一般的な育児知識を身につける必要性を感じないため、子供が小さいうちは雑誌や本、テレビを利用したことがあった母親たちも、彼女の子供が成長するにつれて、利用しなくなる場合が多い。子供の場合も、幼い頃は何冊かの育児雑誌を読んでいたりと、育児に関するテレビ番組を見ていても、ある程度大きくなってからは、あまり利用しなくなると考えられる。

劉：ネットと雑誌は、使う時は何が違いますか？

T：ええと、雑誌は……本買ったんですけど、本当は基本の一ヶ月何回するとか、二ヶ月何回するとか……あの、授乳の仕方とか、本当に基本、見るのに使って、具体的に、離乳食の牛乳はいつからとか、どうやったあげるとか細かいところだとネットの方がレシピが載ってたりとか、そういうので、使えるかなと思って、そういう風な分け方で分けしてたと思います。

劉：他のは、メディアは利用しますか？本、雑誌とか？

T：雑誌は……始めて育児の雑誌は買いました。それぐらいですかね。あとは、ネットでそういうサイトを見ることはありますね。

劉：育児本とか、雑誌とかは？

Y：あ……雑誌……ううん……本当に1歳になる前とかは買ったことがちらほらあるぐらい。今はほぼないです。

劉：他のメディアは使いますか？テレビ番組とか、育児雑誌とか……

K：使わないですね。でも、子供が大きくなったからだと思いますね。小っちゃい頃は、NHKの育児番組とかも見たりしたけど……小っちゃい時で、私は全部初めてで、分からなかったことばかり……大きくなったら大人になった来るので、あまり離れていく感じはしますね。

なぜなら、現在の育児本やテレビ番組は母親初心者や幼い子の母親向けのものが多く、随時情報が更新されることもない。そして、育児本や雑誌の紙媒体出版物の更新を追って購読し続ければ、常に成長している子供の行動とニーズを解明していくのには大金がかかってしまう。一方で、インターネットは登場時から、安さや便利性、即時性というメリットがある。紙媒体出版物とテレビを利用する頻度の減少要因の一つは、インターネットから打撃を受けたことであると考えられる。

II. ネット上の育児情報収集

インターネットが、本や雑誌、テレビなどを代替することは可能となるのではないだろうか。インターネットを通じて、家族や友だち、地域の育児支援センターとの連絡が可能となり、インターネットはいつでも、どこでも最新の情報を手に入れることができる。しかし、インターネット上の情報源は膨大である。すべての情報源が安全で安心できる発信者というわけではなく、なかには怪しい情報もあるだろう。また、情報自体に問題がなくても、多過ぎる情報のなかからピックアップしたものが、自分の子供に最適かどうかの判断に困る場合もある。

II-1. 「必要性和感じない、利用しない」

現在、個人のインターネット利用率は約9割であり、利用者の約8割はインターネットで情報検索をしたことがある。その中でも、20-40代で情報検索を利用しているのは8割以上である（総務省、2020）。よって、ほとんどの母親がインターネットを利用することができると考えられる。それでも、インターネットを利用したくない人は一定数いて、インターネットを利用していたとしても、育児関係の情報に関しては検索しない母親もいる。Rさんは単純に興味がないため、自らインターネットを利用したくなく、子供たちも使わせたくなかった。

劉：ネットは？

R：ネットもそんなに……子供たちもそんなに……やってない、やらせてない。親もそんなに興味がないかな。親は好きなら子供もやるけど、親はそもそもそんなに興味がなかったから、ネットを使うとしても、ちょっとアプリで遊ぶとか……ぐらいかな。

Yさんは同居の祖父母からの協力は十分だと感じており、子供もある程度自立できている。ゆえに彼女は、子供が幼い頃は、インターネットで毎日30分程度情報を収集していたが、子供が大きくなった現在では、育児関係の情報検索はしなくなった。

劉：ネット上のなんか、情報を探しますか？

Y：ううん……ネット……たまに……そんなに……でも、悩むことなく、はははは……ははは……ネット、気になったことはネットで調べるけど……でも、育児にかんしてそれほど……

劉：その中の、少ないですけど、その育児関係の時間は何割ですか？

Y：ええ！ゼロじゃないかな。

劉：子供が小さい時は？

Y：子ども小さい時？育児関係……検索かけるとか……子供の……一日……30分もないかな。多分……

Ⅱ-2. 「めっちゃ使っている」

本研究の対象者たちは、インターネットの利用については両極である。ほとんど使わない母親たちに比べ、育児情報を収集するためインターネットをよく利用している対象者の割合は高く、全体の約 3/4 を占めている。

劉：ネットは、あの一応依存しています？ネット上の情報に……

A：やっぱしていますね。依存はしていると思います。

劉：今、身近なサポートが十分ありますから、ネット上の情報が必要ですか？

S：ああ！ネット上のもあった方がいいですね。うん！

劉：ネットがない場合は、不安します？

S：ああ！そうですね。うん！不安はあると思います。はい。

劉：（情報収集）小さいときも一緒ですか？

S：小さいときはもうちょっと多……うん！多かったかもしれないです。でも、やっぱり、いまもね、小学校なっても、気になることはあるので、ね。

劉：それ以外は、ネットを利用していますね。

H：はい、ネットばかりで……

劉：ネットは子育ての中で、どのような立場に立っていますか？

N：ええ……結構重要だと思います。

育児現場の母親たちにとって、インターネットはいつでも、どこでも頼れる存在である。本調査の対象者のなかでインターネットを利用している母親たちにとって、雑誌、本などに比べるとインターネットは集中力と経済力を要せず、時間がなくても、欲しい情報を見逃すことがない。随時情報が更新されているため、最新情報を簡単に手に入れることができる。そして、文字や写真だけではなく、動画を見ることもでき、直観的に子供の成長について知ることができる。

劉：子供に関することは、ネットで調べる時は、なんで、これをネットで調べますか？理由は何ですか？

A：ああ……やっぱ、そっちのは便利だし、随時更新されてるやん、ネットで……あの、雑誌とか本を買うと、やっぱ大体、その年代、今なら去年の話しをまとめて載ってるから……それより、リアルタイムで知れる、あと、スピードが速いやね。今、知りたいからっていうので、調べるの方が多いかな……

劉：（ネットで調べたもの）自分の子育てに対して、役に立っていましたか？

K：役に立ちました。ただ、なんか、子供のことを調べ、子供は結局それぞれだから、ええと……何だろう……すごく大まかな情報として、安心したり不安したり、そういう意味では役に立ちました。

劉：なぜ、インターネットで育児情報を探しますか？

H：やっぱ、手軽だからですかね、検索してすぐ出てるので……

劉：じゃあ、今ネットの情報に対して、自分はどのような気持ちを持っていますか？

T：すごい役に立つっていうか、選び方はかもしれないですけど、あんまり真剣性にならずに、役立ちそうな情報をピックアップ、できるいい情報源になると思います。

劉：なんで、ネットで子育ての色々を探しますか？

T：何だろう。こういうことがあるって……例えば、ハイハイし始めて、なんか、本だと、このぐらいでハイハイし始めますとかがあって、でもハイハイしながら、こういう動作もするけど、こういうことは異常じゃないとか……なんか、そういうちょっとこう、あのネットだと、いろんな例が出たりするので、そういうので、変じゃないかなとか、熱出る時はどうするとか、どうしたとかというようなデータが載ってるので、そういう具体的なところ……そういうところを知りたい時ネット使ってます。

劉：なぜネットで子育て情報を探していますか？

N：何だろう……携帯見て調べられることは結構早いっていうのと、あとは、何だろう、結構ネットでも、公式の……子育て用品を買ったときも、ネットで同じ物を買った人がいて、それだったらネットは速いし、お金かからないし……

母親たちはインターネットを利用している時間の約半分以上を育児情報の収集に充てていても、ほとんど負担を感じることはなく、喜んで行っている。検索キーワードとしては、「離乳食のレシピ」「子供睡眠時間」「子供の成長」「入学の準備」「保育園の選択」などである。

劉：一日におけるネットを利用する時間は大体どのぐらいですか？ A：1、2時間ぐらいですかね。 劉：その時間の中で、子供に関するのは大体どのぐらいですか？ A：その中の大体は90%は子供に関することですね。
劉：その子供に関することを探すときは、楽しんでいますか？また、あ……調べないといけないっていう負担みたいな気持ちがありますか？ A：ああ……そういうのは、やっぱ、男の子が特有の考え方だったり、悩み？っていうのは、すっごく負担とは思いますが。自分はないことだから、でも、それ以外のこと……だったら、なんか、そこが不思議なんだとか、自分もなんか……そこに行くんだとか、ちょっと楽しんでいる。子供の味方はそうなんだなって思いながら……
劉：キーワードとかありますか？ A：キーワードはその時にもよるけど、そ……子供のしゃべり方が気になったら、吃音、がキーワードにし……あと、同年代の子がどれぐらい……何だろって思ったら、やっぱ、男の子、5歳とかキーワードになってくるから、その時々で色々違う……かな……とは思う。
劉：ネット利用する時は補足のような気持ちを持って、ネット上の情報を探していますか？ A：ネット上の情報は、なんというだろうな、やっぱ保育園の先生はよく子供のことを言うじゃないですか。悪くはあまり言わない。なので、家で見てる子供と保育園出てる子供がやっぱ違うじゃないですか。やっぱ、集団行動をする時の我が子と家にいる時、家は一人子なので、わがママが通じるじゃないですか。でも、集団行動をしている、保育園は集団行動なので、その時わがママが聞かなかつたりとか、そういうのも、保育園の生活活動と家での活動は違う時がたまにあるのですよ。で、それでやっぱ、ネットで調べたりとかっていう……

劉：一日におけるあの、ネットを利用する時間は大体どのぐらいですか？ S：うん……どうだろう。……line……line も入る……line も入るとどうだろう？2時間とか……
劉：子供に関する情報をしゃべったりとか、検索したりとかはほぼ何パーセント占めますか？ S：ああ！子供ね……うん……どうだろう。60%ぐらいかな。 劉：小さいときも一緒ですか？ S：小さいときはもうちょっと多……うん！多かったかもしれないです。でも、やっぱり、いまもね、小学校なっても、気になることはあるので、ね。それでも、やっぱり調べますね。60%ぐらい、前はもっと多かったと思います。70、80とか、うん！

劉：今はネットですか？例えば、何を探していますか？ K：習いことの情報だとか……ですかね。昔は、本当の子育ての方、寝かさせ方とか調べたけど、今はもっと、なんか、情報かな……
劉：ネット上で近くの公園とか、病院とか、施設を探す時がありますか？ K：うん、あります。

劉：ネットで育児関係のことを探すときは、どのようなアプリとか、サイトとかを利用していますか？

H：ええと、大体、YouTube とか、あと、何だけ……ええと、アプリって、離乳食のメニューとか、その月齢に合わせた……検索できるやつは、検索っていうより……それを利用したり、あとは、子育てのコラモが載ってたりするアプリを使っています。

劉：そのアプリで大体何を探しますか？離乳食以外は？

H：と、離乳食以外だったら、へへへ……子供の睡眠時間とか、あと、この月齢で、どのぐらいの成長して、この行動を取りますよそういうのを見てたりします。

劉：探すときは、そのようなキーワードとか、ハッシュタグとかをやっていますか？

H：ええと、大体、7ヶ月などかな

劉：ネットは大体どのような立場って思っていますか？

H：ネットは、ええと、その、すぐ情報が欲しい時……例えば、子供が鼻水……体調が悪そうだけど、これは病院に行った方がいいのか、それで、家で様子も見ている方がいい……まだ、家で様子を見るのは大丈夫かななどを判断する時に、参考にする。

劉：施設を探すときは、ネットは多いですか？また、知人の紹介が多いですか？

T：ネットと知人の紹介、半々ぐらいですね。

劉：自分の時は、YouTube で子育てものを見ますか？

T：今は見ないですけど、あの、仕事はなくて家に一日いて時に、子供の一日はそうやって過ごすのはわからないから、5ヶ月 赤ちゃん 一日とか検索して、それで、私の5ヶ月の赤ちゃんはこうやって一日を過ごしますねみたいな……そういうのを見ました。それにちょっと参考にします。そのぐらいですね。具体的いつ寝てたり、いつ散歩にしたりとかはちょっと自分はイメージが分からなくて、そういう YouTube を見る時はありました。

劉：子供のこと色々探すときは、負担とか感じますか？

T：いいや、全然。探すことは負担はないです。自分は、知りたいと思って探すので……

劉：自分は子育てに関することを探すときは、何を探していますか？

N：ええ……その月齢にあった成長とか、離乳食何食べっていいかなとか、あとは、何ですかね、こういう時どうすればいいかなとか……例えば、何で泣いてわからない時……

劉：インスタグラムでは、よく子供に関することを調べますか？

N：結構インスタグラムで調べてします。

劉：何を調べますか？

N：ええと、赤ちゃんの便利グッズ、何にがいいとか、あとは、同じ月齢の赤ちゃんの様子っていうか、できることは色々書いているので、それと自分の子は照れさせみたいな……へへへへへ

劉：ネット上で、子供のことでなく、母親自身のことは、気持的なことは調べますか？

N：それも、調べたことがあって……大体……1歳から、仕事は始めて、保育園へ行かないといけないので、保育に預ける気持ち……やっぱ、母親……もうちょっと休みすればいいかな……て、そのことも調べたり、なんか、こう……あと、寂しくなるなそういう気持ちもあって、結構わかるなっていう感じなことが多くて……

劉：子供に関する情報を探すときは、負担とかを感じますか？

N：そういうことはないです。調べたい気持ち……

その中で、Hさんは例外であり、育児情報の判断に文句がある。

劉：今育児情報を探す時は、負担と感じますか？

H：うん……そうですね。ちょっと自分しか……探したりとか、知ら出たりとかしてないので、正しいのか正しくないのかも、自分で判断しないといけない……それを子供にして、あげては大丈夫じゃないかを自分で判断しなければならない。それはちょっと……

また、母親たちは子供との遊びの一環として、一緒にネット動画を見たり、分からないことを検索したりしている。

劉：今、母親は悩みがありますけど、子供も自分の悩みもありますよね。その子供の悩みとかはよく話していますか？2人で……

A：ええと、子供……話すけれど、全く答えられないっていうのはよくあります。

劉：じゃあ、そういう時は、どうやって解決しますか？

A：それは……ちょっと調べようねとか言って、携帯で調べたりとか……あの、男性と女性、男の子と女の子の違いが……子供は男の子だから、おちんちん付いてるじゃないですか？そのことについて聞かれたりとか……ははははは……そのようなことを言われると、どうしようかなとか……そのような思ったりとかは、ちょっと……うん……っていうのがあって、じゃあ一緒に調べようやっていう感じで調べたりとかはします。ははははは……

劉：今子供と一緒にいる時は、ネットを使いますか？一緒に見ることはありますか？

T：YouTube 見ます。

劉：何を見ますか？

T：子供の音楽、あの、くまちゃんチャネルとか見たり、一緒に歌を歌って、遊ぶときに見ます。

劉：じゃあ、子供と一緒にいる時は、ネットとか利用しますか？

N：一緒に……調べる時は、調べますけっこう、インスタグラムも見て……

インターネットは情報収集だけでなく、母親たちにとって気分転換の道具として機能している。インターネット空間は、他の人の子供たちの面白い写真や動画を見たり、同じ悩みについての共感を得たり、身近なことについての不満を言ったりする場所として、母親たちのストレス発散に一役買っている。

劉：自分に対して、気持の緩和に役に立っていますか？

N：やっぱり同じようなことを書いてあるんだけど、あ……同じことを持てるかなと思って、ちょっと安心するかな……

劉：そうですね、ネットで、共感と相談とか求めている時はありますか？
T：うん……今はそんなになのかな、何か月前とかは、何ヶ月とかって、どういう寝かしつけをするものなのかな、何時間ぐらい寝るものなのかな、あと、どういう動きをするのか、ネット見て、ブログじゃなくて、子育てのサイトとか、あと、オムツなメーカーとか、そういう子育ての一般的なこととか、見たりはあります。

劉：ネット上のも情報交換とか、共感をもらうとか……そういう機能はありますよね。共感を求めたいですか？

H：ううん……でも、やっぱり育児は大変な時、ええと、自分は大変なのに、旦那が寝てるとか……そういう愚痴見たいなマイナス方面なのは、わりとネットに……ネットに書いたりとかはしています。

劉：ネット上は？

H：ネット上は、わりと、愚痴とかが多いですね。

劉：なぜ、ネットをそういう時を利用しますか？なぜ共感を求める時は、ネットが一番ではないですか？

H：ネットは共感を求めるっていうよりも、自分の気持ちを吐き出す方が多いかな。その吐き出したことに対して、なんか、返信とか、コメントとかはあんまり求めっていない。

また、インターネット上に載っている「家事の豆知識」「生活の裏技」などから得る家事情報も、子育てをしている母親たちの役に立っている。

劉：ネット上の掃除経験とか、片づけ方法とか……それを探しますか？

S：片づけかね、ああ！うん！したことはありますよね。

劉：役に立っていましたか？

S：掃除……そうですね。役にたっていると思います。

Ⅱ-3. 「使いとしても、信用できないのがある」

育児現場の母親たちにとって、育児には絶対的な「正解」はないと言える。そのため、対象者のなかには、身近な人とインターネットの双方から情報収集を行っている母親がいる。インターネット上の情報は、身近な人から得られる情報と異なり発信者が特定できない。保育園や子供公園などの公式サイトは、各自の団体に管理されているが、母親向けの自由に発言ができるサイトやSNS、アプリなどは、情報の発信源がどのような人や組織なのかあまりはっきりしない。

劉：ネット上は、YouTube など専門家のような人たちの情報に対して、信用していますか？

A：ううん……信用はあまりしてないです。やっぱ、こう、一応聞いて、不安が煽られるんですけど……だけど、やっぱりそこまでは、信用してなくて、実際、我が子に適用されるかっていうのは、やってみないとわからないので、ここまで信用しない。

劉：今は、現実とネット上の育児情報をもらえるその手段は、どちらの方が、信用していますか？

A：あああ……半々ですね。ネットでも調べて、やっぱ専門家にとかっていうのは、やっぱしないといけなかな、全部は全部でネットが正しいわけじゃないと思っている。

劉：今は、ネットを利用する時は、何が不安とかはありますか？

H：ネットを利用する時は、その情報が本当に正しいのか、信じていいのかなどわりと…
…例えば、赤ちゃんの足はいつも冷たいものだから、足は温かいと、赤ちゃんは熱してるよという情報はどうか、最近、ちょっと……そういうちょっとした、育児っていうのではないけど、便利だよっていう情報はほんとなのかっていう……

一方で、インターネット上に溢れている子供に関する情報は、母親たちにマイナスな影響を与えている。たとえば、インターネットに載っている優秀な子供や、模範的に育った子供などの情報を見ることで、自分の子育てや子供の健康などについて疑いを抱いてしまう可能性もある。

劉：別の子供を見る時は、自分に対してどのような影響がありますか？

N：やっぱり、同じ月齢でも、個性でもはっやても、子供の歯の生るのも早いですが、
そういう……まだ歯は生いていない子はいっぱいいますな……みたいな……自分の子成長速いかな……逆に、ハイハイはまだできないけど、大丈夫かなとかそういうことをちょっと他の子と比べて、見たりとか……

もちろん、Kさんのようにインターネットからの情報について自身で判断ができ、不安に感じない母親もいる。また、SさんやNさんは、インターネットからの情報を不安と感じなく、信頼している。

劉：SNS 疲れとかはありますか？ ネットと接触できない時は不安になりますか？ 特に子供関係の……

K：ありますね。でも、子供関係には不安がないです。

劉：赤ちゃんの時にも、不安がなかったですか？

K：ええと、10年前で、ちょうどスマートフォンが出て来たんですよ、ネットを繋がるって、パソコンを行かないといけなくて、子供は寝た時、パソコンに行って、mixiをやったり、情報を調べたりしたんですね。その頃より、今の方がスマートフォンでいつでもネットとつながりができるから、依存度は高いと思います。

劉：ネットを使う時は疲れとか、個人上の漏れとかに関する問題がありますが、そういうような理由で、ネットをやめようという気持ちがありますね。

S：いまのところはないですね。

劉：ネット上の情報に対して、信頼していますか？

S：そうですね。うん！信頼は、そうです。信頼しています。

劉：あの、家族とネットからのアドバイスと比べて、どちらが信じますか？

N：今は、ネットだと思います。ネットは最新な情報があるから、親は子育てをしていることはあるんですけど、やっぱりその後……時代が変わっていると思いますので……

インターネットを利用時に、育児に関するキーワードの検索頻度が高ければ、次回検索しなくても自動的に類似した情報が出てくるようになる。育児情報を検索する際には、イ

ンフォメーション・コクーンに落ちいる可能性も考えられる。具体的な育児情報の検索頻度が高ければ高いほど、同じような情報がどんどん溢れてくる。そして、ネット上に溢れている情報に対して「不安を煽る」「多すぎ」といった愚痴をこぼす母親もいる。

劉：インスタグラムを見る時は、大体何を見ますか？ハッシュタグ？

A：ハッシュタグで検索はしないけど、多分、そういう見ている件、そのおススメとして、毎回出てくるだと思う。その人が……

劉：ネット上で情報をもらうとか、あげるとか、その SNS 疲れ、わかりますか。個人情報の漏れなど、不安などに関する問題が考えていますか？

A：ううん……と、やっぱいろんな人と比べすぎで、逆にちょっと、こう卑屈になったりとか……あの人いいなとか……あの子はそこまでできるんだ……っていう風に、うちの子と比べちゃたりっていうので、自分がちょっとどんだんだんだ、うちの子育てはダメなのかなって、マイナスになったりとか……っていうのはあるところはあるよな……すごくやっぱ、ああいう風に言われると、そうしないといけなかなとか……え……思っちゃいますね。

劉：ネットは見るからこそ、不安になったと思いますか？見ない方がもっと安心じゃないと思いますか？

K：確かに、知らなくてもいいことをしちゃうよね。

劉：今は、ネット上の情報は多すぎて、ネットをやめようという気持ちがありますか？

K：それはないですね。なんか、問題なのは、情報のリテラシー、それをちゃんとしてたらいいいんじゃないかなと思います。ただ、情報は多いですね。

劉：はい。分かりました。今はなんか、ネットに対してどのような不安がありますか？

N：意見が多すぎて、どれが本当かわからなくて、その中に自分に近いものを探すっていうか、見て……

Ⅱ-4. 「自己判断や他人との相談を通じて不安を感じない、影響されない」

その不安の対処方法としては、「身近な人と相談する」「一旦情報検索をやめる」などによって、ネット情報の束縛から解放される。自身の判断や身近な人の助言があるため、インターネット上の情報に極端に影響される対象者はいなかった。インターネット上の情報をすべて信用しているわけではなく、信頼できる身近な協力者が存在しているため、たくさんの育児情報のなかから適切なものを選別している。例えば、Aさんはインターネット上に溢れる情報が自分の子にとって適用可能なものであるかどうか疑いを持っている。他の対象者たちも、インターネットからの情報に簡単に納得することは少ない。彼女たちは、身近な信用できる人たちと相談した上で、情報を選別している。

そのなかで、Kさんは、子供が赤ちゃんの頃はインターネット上の情報に影響されていたが、子供が成長するに従って不安もそれほどなくなった。ほとんどの場合、インターネットからの影響は受けていないと言える。

劉：今はネットをよく利用していますが、そのネットの情報に対して、信じていますか？
K：うん……はい。なんか、昔よりは情報も確かになりましたと思います。前は、変なブログが一番最初に出てきたりとかするけど、なんか、今はちゃんとした情報源が上に出て来て、もしそうじゃなかったら、自分でも判断できるように、慣れてきたようにしますね。この10年ぐらいで……

劉：そのような比較的な気持ちではないけど、相手の結構いいことを見る時は不安を煽れますか？
K：赤ちゃんの頃ほど煽れましたね、今は、何だろうな、子供も人格があって、大人になってきたので、大丈夫って思えるから、そこまで不安がないかな……

劉：はい。ネット上のそのような情報に対する、不安とか、心配とかしていますか？
T：ネットは……例えば、熱が出る時にどうすればいいのか、そういうようなことで、あまりブログとかはしないようにしてたけど、人それぞれで結構違うので、なんか、色々見てると、意見が別れるところは結構多いし、全部が見えないから、友だちに聞くのと違って、自分が聞き返せないから、何だろう、細かいところが分からないから、あの、ちょっと参考になるぐらいの気持ちで見えます。全部を目にすると、いろんなことがありますので、なので、自分は、思いながらそういうのを見るので、そんなに不安になることはないかなと思います。

劉：ネットで子育て情報を探すことをやめようという気持ちがありますか？
A：一旦は、やっぱやめます。一旦後、それと距離をきます。やっぱどうしても、子供の、子育てにやっぱ正解とか何もないから、そうしてお手探り状態だから、結局、やっぱこう検索して……っていう、また距離をしてしまっただの繰り返しですよ。
劉：ネット上の色々な情報を見ることは、自分に対してどのような影響がありますか？例えば、すごく優秀な子供を見る時は、気持的にどのような影響がありますか？
A：ああ……基本的に、知りたいことを調べるから……基本的には、そのネットで子供のことを調べる時は、知りたいことだけを調べるから、あんまり、影響はないかな。
劉：母親と一緒に住んでいるから、ネット上の情報をあんまり影響されないということがありますか？近くに信用できるスポンサーがいますから？
A：やっぱ、ネットでこういう風に見ただよねって親と相談して、親が何かしらアドバイスをくれることで、ちょっと安心したりとか、その親……私の親だから、私の性格上のことも分かるやん、だから私に合わせるアドバイスをしてくれる。ネット上の情報を親に伝えて、親が私に合わせるアドバイスをしてくれるから、そっちの方が納得できる方が多い……

劉：YouTube とかは結構育児関係のおススメとか、これ買うべき、子供を何をやらせるべきとか、まあ、色々な YouTuber たちが母親向けの話題がいっぱいありますが、そういう時は、自分はやらなかったってそういう不安とかありますか？
S：ああ！それはないかな。あくまでも、その人たちはその人たちなので、うちは話し合っていていつも決めてるのでね、主人とね、そこには影響されないかな、あまり。
劉：ええと、身近な人からの意見とネット上の意見は違います時、どちらを優先選択していますか？
S：うん……ネットはそこまで……うん、作用されないかなと思いますわね。

劉：YouTube を見る時は、相手はすごいことがやっているのに、自分ができない。そういうことであれば、不安とかありますか？

T：ああ……そんな時、お昼寝はできなくなって、あの私の子供、午前の昼寝はうまくできなくて、結構すごいスムーズに寝てるな……自分にはできないな……っていう不安があります。

劉：その時はどうしますか？

T：友だちに聞きました。そんなの、それは困るにならないようって言われて、YouTube なら、ちゃんと寝てるから載せてるじゃんって言われて……そんなに深く考え過ぎなくてもいいかなと思いました。

II-5. 「インターネットとの関わりは一時的なものは多い」

インターネットは、物理的な距離と場所の制限を超えて情報を交換することが可能であり、他者と何らかのつながりを形成することができる。インタビュー調査の対象者たちのなかでインターネットを利用しない人たちには、ネット上の繋がりが無いのは当然である。

しかし、インターネットを利用している対象者であっても、ネット上で知り合った他者と深い関係を保っているのは、Kさん1人しかいない。他のインターネット利用者はGoogle、Yahooなどの検索エンジンを利用することが多く、他者の投稿にコメントしたり、他者とインターネット上でのやりとりやコミュニケーションをしたりすることはほとんどなく、インターネット上での友だち作りもしていない。

劉：ネット上で全然知らない人とママ友になるのはありますか？

A：うん……聞いたことがあります。けど、私は、ちょっとやっぱり……話せても、深くは話せないかな……と思います。

劉：SNSを使う時は、子供に関する話題をなんか、交流する場合は多いですか？

A：多いですね。やっぱ、インスタグラムとか見ていると、同じ年代そうな子供だったりとか見る時、手が止まって、ついつい見ちゃたりとか、はははは……しない人のも見ちゃたりとかよくあります。

劉：コメントとかしますか？

A：コメントまではしないです。

劉：ネット上でこういうような、同じの子供の母親を探すのはありますか？

A：うん……インスタとかでは、そういう動画を流している人も……いるのを、見たりすることをするけど、ことらから一方見てるだけ……そこから、DM送ったりとかは、したことはないん……

劉：インスタグラム、ツイッターもいいし、知らない人は結構子供に関する面白い話題が出たら、コメントとか、いいねとかはしますか？

S：しない人だったら、しないです。はははははは……

劉：ネット上で、友達作りなどがありますか？

H：してないですね。

劉：他の人のメッセージとか、発表する物を見るだけですか？コメントとか、いいねとかしますか？

H：コメントはしないです。見てるだけ、「いいね」はする。

劉：はい、じゃあネット上で友達作りとかしていますか？

N：していません。

3-3-3-3. オンライン・育児ネットワークを形成する必要性がない

対象者の語りから、インターネットはオフラインで形成したネットワークを強固する機能を持っていることが分かる。LINE やテレビ電話など、様々なアプリやパソコンソフトを通じ、別居の親族や友人、ママ友と会えなくても連絡を取れるわけである。母親たちは昔からのネットワークを維持しながら、可能な範囲で育児援助を受けている。

一方で、SNS やオンライン・コミュニティで新たな人と知り合いとなることは可能であろう。しかし、オンラインのみで、育児ネットワークを作るのは難しい。Aさんのように、インターネットを媒介として知り合った育児仲間と現実空間で会うこともある。その人たちと形成されている育児ネットワークは、オンライン・育児ネットワークとは言えない。また、閉鎖性があるネットワークは、制裁を加えることが容易になり、それがネットワーク内の人々が互いを信頼してしまってもそこに生じるリスクが小さくなる（コールマン、1988）。インターネットで知り合った人々は、共通の友人がほとんどいなく、いるとしても随時でその関係から脱出することも可能であり、閉鎖性もなく、制裁を受けないと考えられる。そのため、インターネットのみでは、信頼関係がある育児ネットワークを形成されない。

母親たちは、インターネットで育児情報を探す際、情報源の相手が誰かより、情報自体の信憑性をより重視している。毎回の情報検索では、母親は特定の育児サイトやSNS 上の誰かの発信を見るより、欲しい育児情報に関するキーワードで検索した内容を重視する傾向がある。それ故、わざわざオンラインで信頼できない他者の誰かとつながりを作ることには必要性を感じない。

そして、対象者たちは、インターネット上の情報に対して信頼度が低いものの、長時間のインターネット利用により自己判断ができるようになる。また、信用できる現実空間の育児支援者と相談した上で、インターネットからの情報に対応し、インターネットからマイナスの影響を受けないようにしている。それ故、現在の母親にとって、ネット上の他者と育児ネットワークを作る必要性を感じなくても、ネット上の情報は大事な情報源であり、参考、補足としての機能を期待できる。オンラインでは、人と人とのつながりは育児資源と言えないものの、情報自体は資源であるといえる。

3-3-4. どんなサポートを誰がしてくれるのか

対象者たちの語りから、現在の育児ネットワークは昔のネットワークと比べて解放している。母親と血縁、地縁関係を持っている協力者は母親の近くにはいないものの、友人や

ママ友、地域の育児支援組織は育児ネットワークに浸透している。しかし、上節の分析から見ると、協力者たちが提供してくれるサポートの種類と量はそれぞれ異なる。筆者は協力者とその人が提供できるサポートとの間には、母親と協力者の信頼関係が何らかの作用をしていると考える。

3-3-4-1. 実際のサポート

子育てのなかには「授乳」「おむつ替え」「食事をさせる」「子供の迎え」など、様々な年中無休の労働がある。また、子供を産んでから、洗濯、掃除など労働の量と頻度も増加する。ゆえに、働いているかどうかにかかわらず、母親1人で完璧に子供を育てることには、困難が存在していると考えられる。信頼でき、「家」に自由で入りができる協力者がいれば、このような身体的なプレッシャーが減少するはずであると考えられる。つまり、実際の労働に対して、母親は協力者を求めている。

I. 信頼関係を持つ相手は実際のサポートができる

I-1. 同居者は日常的には実際のサポートはできる

ほとんどの育児をしている女性は、家庭外の社会的な仕事をしているかどうかにかかわらず、家庭内部の労働をする必要に迫られている。家庭内部の労働は、家事や育児など様々である。プライバシー上の考慮によって、「家」に自由に出入りできる者でないと、「家」の領域内の仕事まで手を伸ばすのは難しいと考えられる。

本調査の対象者たちの語りから「家」内の労働に対して、同居者は一番頼れる者であることが明らかとなった。同居者は、常に女性が住んでいる「家」に入ることができ、最も親密な関係を持っている。ほぼ毎日顔を合わせ、お互いに協力の期待を持っている。また、対象者たちのような役割分業がはっきりしていない家庭であっても、家事や育児など実際の労働はほとんど女性のみの労働と考えられている。

実際のサポートには、時間のコスト、現場での手伝いが必要である。さらに、「家」という特性を加えれば、母親と自由に「家」の領域に出入りすることができるような親密関係を持つ必要がある。つまり、母親に実際のサポートをするのは、協力者が「家」の現場にいて時間をかけるのが当然である以上、その女性と何らかの強い紐帯を持つ必要がある。家庭外部の協力も同様であると考えられる。一方で、現在の日本では、雇用関係で結ばれた家庭使用人が減少しているため、日常的に家庭内労働を手伝うことができる協力者は、「家」に日常的にいて共同生活をしている同居者である。

I-2. 別居中の家族はある程度で家に入れる

他の家庭外部者と比べ、別居中の家族は「家」に入りやすいと考えられる。母親たちは、家族、親族集団、友人、同僚などとの親密関係の中で、非親族より親族に対して「家」に入る信頼関係を持っている。女性にとって、自分の実家とは今までずっと親密関係を維持しており、夫の家族とは結婚する際に関係が始まった。夫の家族との関係は女性にとってあまり親しさを感じないかもしれないが、夫との深い関わりによって、その家族が持っている資源への接近は可能である。そして、その家族メンバーも「家」に入るのは問題がない。いわゆる、現在の実家から離れる「小さな家族」にとって、婚姻縁と血縁は切れない繋がりと考えられる。

そのつながりが存在するため、別居としても家族は母親業をしている女性の協力者とし

て、育児の中で何らかの協力役を果たしている。対象者の母親たちにとって、別居中の家族は「出張した時では、遠いところに住んでいる祖母は家に来て子供面倒してくれる」、「実家の祖父母は掃除、洗濯、料理をしてくれる」など日常的なサポート及び緊急時のサポートをしてくれる存在である。血縁がある家族からは、毎日ではないものの、定期的あるいは不定期で実的な協力を得ることができる。

II. 子供のお昼は学校・保育園に占められる

子育ての中で、時間と精力の投資は非常に重要である。自立できない子供を1人にすることは、危険でありほとんど考えられない。しかし、現在は働いている母親が増え、本調査の対象者たちも育児休暇を取っている2人を除き、残りの母親は現在すべて社会的な職業を持っている。いわゆる、働いている母親たちのお昼時間は、子供と一緒にいるのは難しい。「家」の内部には、その時間常に子供の面倒を見れる大人がいなければ、「家」の外部の協力者を求めるしかない。

対象者の母親たちは、保育園、学校から実的なサポートを感じないと語ったものの、実はそうではないと考えられる。母親たちは自覚していないかもしれないが、「保育園」「学校」にいる時間は、お昼時間の大半を占めている。その時間に「保育園」や「学校」が子供を見ていてくれるからこそ、母親は自由に時間を取り、育児現場を離れて外で仕事をすることができる。また、子供たちが教育教養施設にいる時間、母親は子育てに時間を投資する必要がある。そして、子育て現場から離れた親は、子育て現場にいる母親より精力の投入も少ない。通学中の子供を持つ母親は、知らず知らずのうちに、教育教養施設から協力を受けている。

さらに、子育ては「家」という領域内に限ったことではないと考えられる。なぜなら、子供は、成長に連れて「家」から出て外の社会と接触し、家族外の人間関係を形成していくのは当然なことと考えられる。一方で、子供を身体的に健康に成長させるだけでは子育てと言えない。つまり、子供の教育も育児の大切な一部である。しかし、母親やその他の家族メンバーのみでは、子供の集団行動についての「教育」をすることが難しい。集団行動についての「教育」は、社会に相応しい人材を育成するの不可欠である。

人間は群れ集うことを好み、集団行動を望む特性があるため、集団行動の方法を知る必要がある。しかし、保護者は子供の教育について第一的な責任を有するが、「家」の中だけでは、家族メンバー以外の人とともに集団行動の技を身につける機会を得るのは難しい。親から離れ、同世代の子供たちが集まる「保育園」、「学校」は集団行動の技と規範を身につける場所である。対象者の語りからも、子供たちは保育園や学校にいる時は、集団行動を取って人間関係を構築しているといえる。そのため、「保育園」、「学校」は子供のしつけの面にも協力できる。

III. 他の預かりサービス

以上で述べたような日常的なサポート以外では、様々な育児支援組織が子供の一時預かりサービスを提供している。子供を産み育てやすい社会をめざし、公的や民間の育児支援組織が形成され、様々な支援行動をとっている。例えば、弘前市の「一時預かり事業」では、緊急時や育児に疲れた家庭が、子供を保育園などに一時的に預けることができる。他には、子育て支援センターの託児所、放課後支援やこども食堂なども母親の育児プレッシャーを削減している。また、産後の母親に食事を提供する民間育児支援組織もある。

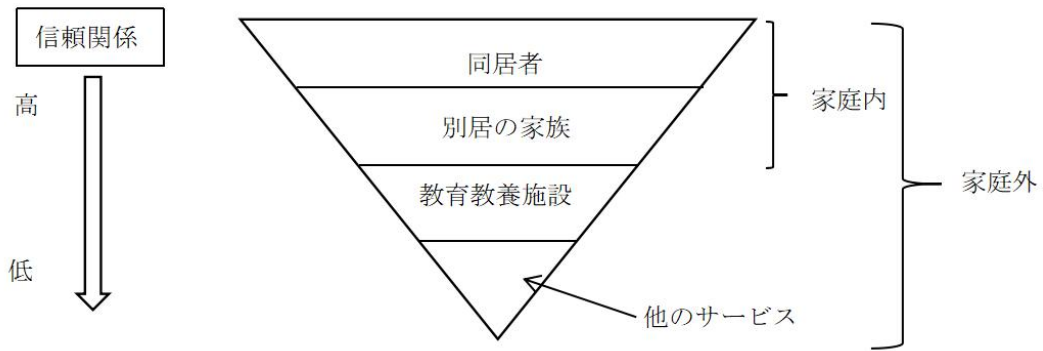


図3 実際のサポート

上述によって、母親と協力者との関係は、実際のサポートが受けられる育児ネットワークの構造に影響をもたらしている。図2で示されたように、同居者や別居の家族、親族は、母親と共通の家族、知人などがいるため、ある程度の閉鎖性がある育児ネットワークを持ち、子育ての資源をもたらしている。この緊密な関係を持っている育児ネットワークは、ほかの育児協力者と形成された育児ネットワークより、共通の知人からの制裁を加えることが容易だろう。そのため、母親は同居者や別居の家族などと信頼関係を構築することができる。つまり、育児ネットワークの閉鎖性が強いほど、信頼関係は構築されやすい傾向がある。同居者は共同生活をしている人として、別居の家族より母親と緊密な関係を持っているため、その人からの実際のサポートは多い（図3）。この育児ネットワークが、プライバシー領域の内外に実際のサポートをもたらしてくれるということが簡単に理解できるのである。

しかし、子育てに専門性は重要なポイントとなる。学校や保育園などの教育・教養施設や育児支援センターなど地域育児支援組織は育児の専門性を持っている。このような育児支援組織は母親と閉鎖的な関係を結ばれないものの、その専門性は信頼をもたらしている。そこのスタッフたちは「家」に入れないものの、家庭外部の実際の協力者として大きな役割を果たしている。

3-3-4-2. 精神的なサポート

子育ては身体的な動労のみならず、「子供を大事に育てなければならない」というプレッシャーから、精神的な労働も必要となる。現在の育児情報は爆発的に増加し、母親たちには判断力が必要である。また、母性愛神話や周囲からの「よい母親」像のプレッシャーについて、母親たちは精神的なサポートを求めている。すなわち、子育て支援は実際の協力だけでは足りなく、ストレス発散や情報判断など多種多様な精神的なサポートが不可欠である。

I. 同居者は頼れる相談者であり、イライラを抑える

育児において、親密関係及び強い紐帯を持つ人は、母親にとっては信頼できる相手である。その信頼できる相手とは、深い内容まで、何でも気軽に話せるはずだろう。特に、母親と共に子育てに責任を持つ父親は、この相手になりやすい。父親は母親、子供両方と親密関係を持ち、ほぼ毎日顔を合わせるのができる。お互いの性格を理解し、自分の家庭に適用する意見を提供できる。その意見の正しさはさておき、心理的なイライラを抑えるの

には役立っている。

対象者たちの語りから、「家」の領域内において夫は何でも話せる相手であるため、夫は実際的な手伝い以外でも、子供関係の相談相手として一番頼れる存在である。自覚を持って育児をしている同居者は、母親の育児情報源にもなる。しかし、うまくいかない場合も少なくない。

また、シングルマザーにとって、同居の家族は働いてたり、健康状態がよくなかったりするなどの理由で、実際的なサポートを提供できる程度には差異が存在している。しかし、同居の祖父母、家族は、子育ての経験を教えたり、育児の悩み相談に乗ったり、意見を述べたりすることで精神的なサポートを提供できる。母親は、夫と同様に、その同居者たちと強い紐帯を持っており、協力を受け易い。

同居、婚姻などの関係で共に暮らしているため、お互いに信頼関係を構築している。その信頼関係があるからこそ、その相手とは何でも話せ、その人からのアドバイスを聞くのには抵抗感がない。そのため、信頼関係を持っている同居者から精神的なサポートを得ることができる。

Ⅱ. 同じ年齢・月齢の子供を持つ家族、親しい友人・同僚は常に話しがある

すべての母親に同居者がいるわけではなく、すべての夫が頼れるとも言えない。一方で、同居者がおり、その同居者が頼れる場合であっても、家庭内で解決できない問題も少なくない。シングルマザーだけでなく、両親2人ともに育児未経験者の場合でも、お互いの相談とインターネット等での情報の検索のみでは子育てがうまくいかない場合もある。また、子育てのプレッシャーは、子供からのものに限らず、他の家族が悪意なしに母親に何らかの圧力をかけることもある。ゆえに「家」の外部の精神的な協力者が必要である。

地元を離れ、同居者もいないシングルマザーにとっては、子供が簡単な家事の手伝いをしてくれるとしても、精神的なサポートは受けられない。シングルマザーの場合、「家」の外部の協力者はさらに重要になる。その協力者は昔の友人や、仲がいい同僚などを含む。つまり、家庭内に相談相手がいない場合には、親しい友人、同僚、親族が精神的なスポンサーとして機能する。その人たちと、育児関係の相談をしたり、情報を交換したりすることが多い。しかし、その家庭外部の協力者の中で、精神的なサポートができる親族は主に同世代の人や同世代の子供を持つ人である。親しい友人、同僚もほぼ子供を持っている人に限定される。

母親は、その人たちと付き合いを通じ、時間と感情、むしろお金を投資する上でお互いに信頼関係を構築し、期待する育児問題の答えを得る。しかし、子育ての大部分は「正解」がないと言える。その人たちとの情報交換や相談があるにはあるが、そこから得た情報に疑いを持ってもおかしくない。

友人、同僚、親族などは、同居者より有効な情報源になれるかもしれないが、家庭外の協力者はいくら親しいとしても、同居者の補足に留まる。人間関係や利害関係などを考慮し、深いところまで話せたとしても、話していないことはまだある。

Ⅲ. 育児関係組織の従事者・医者には意見をもらう

個人的な協力者以外には、育児支援組織がある。対象者たちの語りから、子供の育ちに関する問題については、男性や高齢の家族、同世代の女性たちより、育児の公的機関の従事者が頼れる存在である。特に、育児支援組織は、時代に合った情報や、時代特有の育児プレッシャーについての役に立つアドバイスを提供してくれる。

そして、育児機関で働く専門免許を持つ協力者たちは、子供との接触時間が他の協力者

より長い。そのため、育児経験は一般人より豊富であると考えられる。お互いに長い付き合いがなくても、その専門性から、子育てのことにに関して信頼関係を構築できる。育児の悩みのすべては言えないが、通常の悩みを相談でき、育児知識と情報を得ることが可能である。専門家たちは、日常的に母親たちの育児現場に入ることはできないが、育児に関する知識を教えたり、情報を伝えたりすることを通じ、母親の精神を支持している。

IV. インターネットで愚痴を言う

親族にも、友人にも、育児機関にも育児のストレスを言いづらいことがある。誰かの文句や愚痴を言いたい場合、面識がある人がよい相手とは言えない。例えば、夫に対する愚痴は、夫と自分の両方と親しい関係を持つ家族や友人などには言えない。また育児機関への不安は、相手を不安にさせないために、同じく利用者である友人には言えない。

そのような場合は、インターネットの匿名性が役に立っている。見る人がいるかどうかは重要ではない。そのマイナスの気持ちを吐き出すだけで、ストレスの発散ができる。大騒ぎすることなく、ある種の本音が言えるため、インターネットは精神的なサポートをしている。

3-3-4-3. 情報を得るサポート

子育ては母親、その他の家庭メンバーにとって、通常時、緊急時に関わらず、毎日 24 時間対応せざるを得ないものである。そのため、日常的に育児知識を身につけ、育児情報を収集する必要がある。以上述べたように、家族や友人など親しい関係を持つ人や、専門性がある育児支援組織から情報を得ることができる。しかし、現代の母親はそのような強い紐帯や深い信頼関係を持つのみならず、育児をきっかけとして、新たなネットワークを形成している。このネットワークは弱い紐帯を持ち、深い関係を持たない人から何らかの育児情報を得ることができる。

I. インターネット上には育児情報を検索するが、現実の人との相談が必要である

現代では、現実空間で面識がある人々だけでなく、マス・メディアやインターネットから育児情報を得ている。母親向けの雑誌、育児本、育児テレビ番組からの情報を、母親は頭に入れておき、育児情報のライブラリーを作っている。インターネットの登場は、育児に新たなメリットをもたらす。インターネットは、常に更新され、リアルタイムで対応でき、大量の情報発信源を有する。スマートフォンとタブレット末端の普及により、そのメリットはより一層飛躍した。母親はインターネットを使って、どこでも欲しい情報をすぐに入手し、多様な育児情報をストックしておくことができる。

しかし、インターネットの育児情報検索には、大きな問題が存在している。それは、インターネットの彼方の発信源は、面識がなく簡単に信頼できる相手ではないということである。そして、インターネット上の情報検索では、毎回同じサイトや同一の人物の発言を見ることはほとんどない。長い付き合いがないため、お互いに信頼関係を構築できない。ゆえに、発信者やサイトの情報に対しての信頼度は高くない。多くの母親は、インターネットから得た情報に関しては、信頼関係を持った人と相談した上で、納得するかどうかを判断している。

II. ママ友と共にイベント参加、軽く情報交換以上は難しい

強い紐帯があるネットワーク以外に、子育ての際に、育児の技術の向上を目的として、同年齢、同月齢の子供を持つ他の母親たちと新たなネットワークが形成される。このような母親集団のメンバーは、「ママ友」と呼ばれる。対象者の語りから、彼女たちは、ほとんどママ友と深い関係を持っていない。その関係には大量の時間や感情を投入することなく、相手からの感情も期待していない。ママ友の関係が、他の関係に転換することも少ない。

ただ、一緒に育児イベントに参加をしたり、子供の行事を準備したりすることが多い。「離乳食のレシピ」や「子供の身長、体重」など表層的な育児情報を交換している。弱い関係を持ち、お互いに期待がないため、深い信頼関係を構築することはなく、深い話しや本当の悩みは言えない。

ママ友との付き合いは子供をきっかけとしているため、話題は育児の内容に限定される。その内容は母親たちにとって、親しい関係を持つ人から得た情報の補足としてのみ役立つ。

III. 別居中の親族に行事やお祝いの意見を聞く

親族は実際的なサポートにしろ、精神的なサポートにしろ、有力な協力者と考えられるが、実際はそうではないと考えられる。別居しており、物理的な距離がある家族であっても血縁があり、様々なことについて信頼関係を持っている。しかし、育児についてはその信頼は低くなる。母親たちは「祖母の育児は何年前のことですから」「祖母の健康を心配します」「祖父母の育児経験は子どもの時代に相応しくないとします」などの理由から、高齢の地元の家族からは、実際的なサポートを受けるが、精神的なサポートは受けられない。

だが、その家族たちと子育ての話を全くしないわけではない。電話やテレビ電話、SNSのチャットなどで別居の家族と定期的に連絡を取り、日常的な会話を続けている。その会話のなかで、子供に関する話しも一部のみを占めている。実家の意見を聞きたくない母親たちは、別居の家族にはほぼ悩み相談をせず、意見を得たとしてもそれを重視していない。聞いたとしても、家族の伝統行事のやり方、お祝いの準備などをに留まり、本当の悩みは言わない。

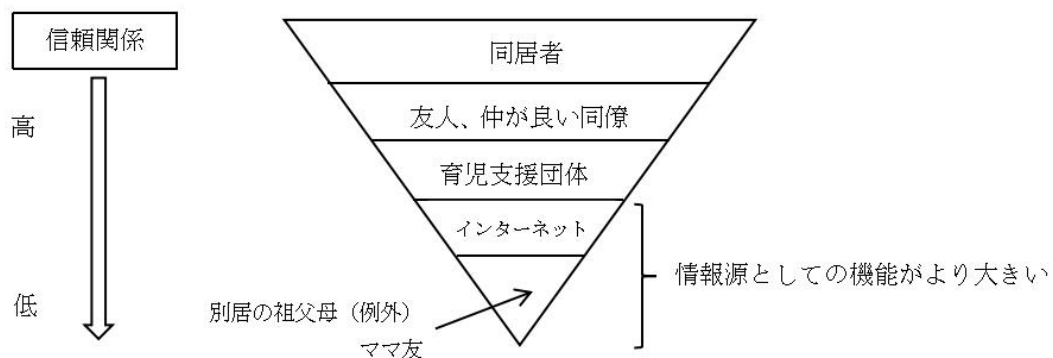


図4 精神的なサポートと情報収集

実際的なサポートと同様に、母親が協力者との関係は、精神的なサポートができる育児ネットワークに影響をもたらしている。相互の関係は緊密なほど、信頼関係を構築しやすく、精神的な協力が多く傾向にある。しかし、図4を見ると、別居の親族は下の順位にあ

る。それは、物理的な距離の遠さや世代間の価値観の違いなどの影響と考えられる。

3-4. インタビューによる考察

前節の分析から、それぞれの母親たちは、いくつかの育児支援ネットワークを持っている。同居者、別居の家族、友人、同僚、ママ友などは母親と個人的な育児支援ネットワークを形成しており、育児支援組織の公的機関、NPO、教育教養施設も人と組織間のネットワークを形成している。育児支援ネットワークの内部の個人や組織は、母親が活用できる育児についての社会関係資本と言える。社会関係資本を社会構造から生み出された資源である（パート、2001）。育児ネットワークの個人や組織は、母親にとって育児の資源となると考えられる。

育児ネットワーク内で、母親とほかの個人や組織の間の紐帯の強弱はそれぞれ異なる。血縁や婚姻の縁で親密な関係を持っている人々は強い紐帯を持っているが、母親と他の個人、組織はほとんど強い紐帯が持っていない。図2で示したように、各協力者の間に繋がりが無い場合もあり、育児支援ネットワークの全体にははっきりした境界が見られない。各協力者は、それぞれの面で母親にサポートを提供している。また、すべての協力者は母親にとって情報源となる。

実質的なサポートにしろ、精神的なサポートにしろ、母親は、婚姻、血縁で結ばれた人たちと親密関係を持っており、時間的、感情的、むしろ金銭的な相互の投資がより多い。共通の家族や知人などを持つため、その人たちへの信頼度が高く、サポートの量と質が期待できる。このような人たちから得られる家事や育児の支援ネットワークは、子育て期の女性にとって重要なネットワークであると言えるだろう。

次に、友人や仲が良い同僚などとは接触が多く、友人同士は知り合いであることもある。家族とのネットワークほど緊密ではないものの、出産前から維持されている関係である。その関係には、お互いのことをよく知っており、信頼関係の形成ができています。そのような人たちからも、きっかけがあれば、育児に関するサポートを得るのは難しくない。

それ以外に、育児が縁となって関係が形成されたママ友とのネットワークは、頻繁な接触と連絡がないために親しい関係を持っていない。時間と感情の投資は少なく、共通の知人がいるのも少ない。連帯が弱いので、お互いの期待や信頼は小さい。このような関係は、他の関係への転換は不可能である場合が多い。これと同様に、関係転換が不可能であり、育児が縁となって形成された育児支援組織とのネットワークがある。育児支援組織との育児上の需給連結は、母親から育児支援組織への片面的なものであり、接触も多くないが、その人々の専門性は日常的な連結の代わりに信頼をもたらす。

また、インターネット上では「発信源不明」や「多すぎ」の情報について、疑うのことは疑うものの、インターネットを日常的に利用して育児情報検索やマイナス面の気持ちを吐き出す母親は少なくない。母親たちは信用する面識がある人々と相談した上で、ネット情報の真偽を判断し採用する。つまり、インターネットは、育児情報のライブラリーとして、母親たちをサポートしている。また、母親たちが、育児に関してインターネット上でネットワークを形成することはほとんどない。ネット上の情報源との付き合いは利己的、片面的なものが多く、時間と感情の投資はほとんどなく、ネットワークの一端や信頼関係は形成されない。それでも、インターネットは、育児の協力者として日常的にある程度の役割を果たしている。

図3、図4で示した通り、協力者とそれぞれができるサポートの種類は、母親とその相手との信頼関係に規定される。信頼関係が深いほど、協力できる種類と量が多い傾向があ

る。しかし、育児現場の母親たちは、別居中の祖父母と深い信頼関係を維持しているが、「世代間の価値観の違い」や「接触の少なさ」などが原因で、子育てに関する精神上的の協力者になるのは難しい。

家族や友人、同僚は、育児に関する関係でだけではなく、育児から他のことへ関係を転換することができる。このようなネットワークは、他のことにも緊密に繋がっており、簡単に脱出することは難しい。また、その形成のために様々な投資をし、利益を得ることに期待している。

しかし、育児のために結ばれたママ友や育児支援組織と関係は、別種の関係に転換されることは少ない。このネットワークは子供の成長に従って弱くなる場合がほとんどである。つまり、母親とママ友間や、母親と育児組織間に形成されたネットワークは、育児に限定され、他の緊密な関係を持つことがない。コストの投入がないため、たくさんの育児利益を得ることに期待していない。また、そのネットワークから脱出としても、他のメンバーに大きな影響をもたらすことはない。

つまり、育児は母親1人、家族内でできることではない。母親の育児に関する関係資本が多く、ネットワークが豊富なほど、いずれのサポートにおいても協力者が多くなる可能性が高い。そのネットワークの内部で、紐帯が強いほど、お互いの親密性が高くなり、信頼関係の構築がし易い（育児に関する専門性は信頼関係の構築に役立っている）。信頼関係の強弱によって、協力者ができるサポートの種と量が異なっている。しかし、「世代間の価値観が違う」などのため、親密関係を持つ別居の家族は例外で、母親に精神的なサポートを提供するのは難しい。

要するに、子育て以外の事情で母親と親密な関係を持つ人たちと育児の専門知識を持つ人や組織は、育児のみでネットワークを形成している人や組織より信頼関係の構築がしやすく、子育ての各方面で頼れる協力者となる可能性が高いと考えられる。

4. 子育てエリアの育児ネットワーク形成

4-1. フィールドワークの概要

本研究は、インタビュー調査と並行し、フィールドワークも行った。具体的には、弘前市役所こども家庭課、駅前こども広場、育児支援NPOの協力のもと、育児中の母親が集まりやすい場所での参与観察を行った。育児支援センターで開催された子育てに関するイベントに参加した母親と、「子供の広場」で子どもに自由遊びをさせている母親を対象とする。育児イベントでは、スタッフの紹介を通じて母親たちに話し掛けることが可能であったが、自由観察の場合では、母親と交流はできなかった。

表 6. フィールドワークの一覧

場所	スタッフ	子供	ノート番号	日時	時間
弘前市ヒロロ 3 階	○	○	ノート 1	2021 年 7 月 1 日	10:00—12:00
弘前市ヒロロ 3 階	○	×	ノート 2	2021 年 8 月 12 日	13:30—15:00
弘前市ヒロロ 3 階	○	△	ノート 4	2021 年 8 月 20 日	10:30—11:30
弘前市ヒロロ 3 階	△	○	ノート 3	2021 年 8 月 13 日—8 月 27 日	自由時間
弘前市ヒロロ 3 階	×	○	ノート 5	2021 年 11 月 4 日—12 月 26 日	自由時間

いない——× 少ない——△ いる——○

4-1-1. 子育てエリアの概要

本調査のフィールドは、弘前市内のヒロロの 3 階に設置された育児エリアである。ヒロロとは、弘前駅前のショッピングモールであり、3 階には、公共施設ヒロロスクエアが設置されており、子育てエリアがこの一角にある。

子育てエリアには、ひろさき子育て世代包括支援センターとこども絵本の森、弘前駅前子供の広場がある。子供の広場には「遊び場」「プレイルーム」と「託児所」が設置されていて、ほぼ毎日利用者が訪れる。また、子育て支援センターは主催者として、定期的に子育てイベントを空いてるスペースや部屋で開催している。

この場では、子育ての相談、指導、一時預かりなど育児支援を提供している。また、そこには親子が無料で利用できる遊び場も設置されている。新型コロナウイルス感染症の影響で「3 密」を避けるため、各施設とイベントは、人数と時間の制限がある。

4-1-2. 子育てエリアの特徴

フィールドとなったのは、育児エリアのイベント開催場と「プレイルーム」、「遊び場」である。フィールドは、ショッピングモールに設置されているため、利用者にとって、この子育てエリアは探しやすく、子育て以外の用事も済ませられる便利なところである。また、「プレイルーム」やイベントを開催場には、子育て関連の仕事に従事しているスタッフが配置されている。子供の「遊び場」には、スタッフが常駐していないときでも、すぐ近くのスタッフから協力をもらえる。この公共空間は、参加自由、出入り自由のため、利用者たちの活動には強い制限がない。

一方で、インタビューの対象者 Rさんは子育て支援センターのスタッフである。彼女の話によると、ヒロロ 3 階の子育てエリアを利用しているのは弘前市内の人のみならず、近隣の市町村や隣県の利用者たちもいる。そのため、利用者たちの間には、もともと面識がない場合がほとんどである。毎回のイベントでは、スタッフが中心人物となり、利用者間のコミュニケーションの橋渡しとして、信頼を提供できる媒介者を担っている。自由遊びのときは、現場の中心人物はほとんどいない。母親は自分の子供に専念していることが多い。また、それぞれが参加するイベントが異なることから、同じ「プレイルーム」や「遊び場」などを利用している人たちであっても、お互いに馴染み深くなる可能性が低く、繋がり形成するための条件が満たされていない。信頼関係を構築できる媒介もその場に存在せず、母親も子育てに追われているため、他の母親と接触するきっかけがなく、その必要性を感じていない。

子育てエリアの利用者は、女性が圧倒的多い。母親向けのイベントが多いことが要因と

考えられる。また、自由に遊べるエリアは、祝日休日になると、数は少ないものの父親が同行者として来ることがある。また、祖父母と共に来場するグループも見られたが、母親と子供のためのグループが大きな割合を占めている。平日は、ほとんど子供と母親のグループのみである。休日、平日に関わらず、男性利用者の数は、女性利用者よりも少ない。

4-2. フィールドワークの結果

今回のフィールドワークは主に「スタッフがいる子育てイベント」、「スタッフがいるプレイルーム」と「スタッフがいらない遊び場」に分けている。いずれの場合でも、子供が母親の側を離れない限りは、母親が子供、特に幼い子から目を離すことは難しい。子育てイベントに参加するにしろ、「遊び場」に遊び来るにしろ、母親の注意は子供の姿に集中している。そのため、母親は他の親と交流する時間と暇はほぼないと考えられる。母親同士間の繋がりを形成するため、スタッフの存在と役割はキーになる。

4-2-1. スタッフがいる子育てイベント

子育てイベントに参加するため、事前予約が必要であるが、同じイベントの参加者が誰であるのかは、参加者同士ほぼ知らなかった。面識がない人に対して、警戒心を持つのは当たり前のことと考えられる。しかし、その場には、信頼できる第三者である子育て支援のスタッフが存在している。育児イベントは、主にこのスタッフを中心に展開し、母親たちの行動をある程度コントロールしている。子供は現場にいるとしても、信頼できるスタッフたちからの協力によって、母親は育児から解放される。母親は子供の行動に縛られない場合、他のことに注意を分散することができる。つまり、スタッフの存在は、母親が育児ネットワークを構築するための時間を提供している。

また、母親たちはスタッフに信頼を寄せている。そのスタッフが紹介してくれる相手は、完全に面識のない他者に比べて、ある程度の信頼関係を構築しやすいと考えられる。要するに、スタッフからの紹介は、母親間の育児ネットワークを構築するきっかけを提供している。例えば、「こもも Café」に参加する母親たちは、スタッフたちとのやりとりが多かったが、母親間のコミュニケーションもイベントの後半から少し現われてきた。帰るまでに、お互いの連絡先を交換することはなかったのため、今回のイベントをきっかけに新たな付き合いが生まれることはなかったと考えられる。それに対して、「赤ちゃんのおもちゃ作り」の参加者たちでは、面識があった母親 A と母親 B の 2 人の間には最初からコミュニケーションがあった。初めて参加したの母親 C はスタッフからの紹介や話題の提供を通じて、他の母親との話しが始まった。最後まで連絡先を交換しなかったが、スタッフによると、これから一緒に同じイベントに参加する予定がありそうであった。また、「ママの同窓会」の参加者たちは、イベントの最後では、前後に座っていた母親たちのあいだで連絡先の交換が少し見られた。しかし、この後どこまで関係を発展させるのかは、母親間の付き合いを通じ、彼女ら自身が決めることである。

4-2-2. スタッフがいる「プレイルーム」とスタッフがいらない「遊び場」

「プレイルーム」にはスタッフがいるが、イベントのように他の母親の行動をコントロールすることはなく、主体的に母親に協力することがほとんどないため、「遊び場」はスタッフがいらない状況と同じと考えられる。

「プレイルーム」と「遊び場」には、特定の行動制限がないため、もっと自由な行動を取れるはずだが、実は母親の行動は子供の行動に縛られている。母親の精力と時間は子供に占められていると観察できる。子供が公共スペースで遊んでいる時でも、大人は終始子供から目を離さないようにしているため、他者と交流する時間が少ない。大人たちは黙って見ているように見えるが、実際は子供から目を離さないように集中している。子供を見してくれる第3者はいない場合には、大人間のコミュニケーションを構築することは難しいと考えられる。弘前市こども家庭課の職員によれば、「プレイルーム」と「遊び場」を利用時に、母親同士の友人ができるケースが多い。しかし、筆者の観察では、知らない大人たちが交流している機会はあまり見られなかった。子供を媒介に他者と会話をする機会をつくる人もいるが、あまり多くはない。それは、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、利用者たちが他者との接触を控えていることに起因している可能性も考えられる。

イベントへの参加と同様に、この2つの場では、同じ時間を共有している利用者たちは互いに面識がない。知らない他者に対して警戒心があることが、育児ネットワークが形成されない原因と考えられる。信頼できる第3者もいなく、他の母親と交流を始めるきっかけや信頼関係を構築するきっかけもほぼない。人間関係のストレスを増加させないため、「プレイルーム」と「遊び場」を利用する母親はママ友作り、育児情報交換、子供が友だちを作るといった目的より、自分と子どもが楽しむ時間を作りたいと見える。

4-3. 考察——育児ネットワーク形成のきっかけには第3者が必要

フィールドワークでの観察により、育児の現場で主役を担っているのは母親であることが判断できる。特定のイベントや自由遊びも、母親と子どものみの親子グループが一番多く見える。確かに、特定の育児イベントは、母親向けのものが多いため、男性はほとんどいない。また、「遊び場」や「プレイルーム」での自由遊びも、女性の方が圧倒的に多い。男性が来ても、ほとんど女性の同行者がいて、男性のみの子供連れが子供広場に来ることは極めて少ない。

たまに、祖父母や友人など他の同行者と一緒に来る場合もあり、彼ら、彼女らは母親の協力者の役割を演じ、母親のストレスを緩和できる。その場で、従来の育児ネットワークを強固にする。育児支援センターのスタッフたちが、子供の面倒を見てくれるので、母親は安心して子供の預かりサービスを利用することができる。公的な支援センターのスタッフたちの専門性は、信頼をもたらし、育児ネットワークを構築していると言えるだろう。そのような信頼できる協力者がいれば、母親は育児の現場から一時的に離れることもできる。

しかし、子供広場で初めて会った人と、育児ネットワークを構築することは難しい。理由としては、接触が少ない人とは緊密な関係が構築されることが考えられる。特に自由に遊ぶことができる広場では、自分の子供の姿に専念している母親は他者と接触するきっかけがなく、人間関係を作る必要性を感じない。そのため、共通の友人がいなく、制裁を加えることは難しい。閉鎖的なネットワークを形成されるのはほぼ不可能であり、信頼関係も持っていない。同じ年齢や月齢の子を持つ母親の間では、子供同士の遊びを媒介として、会話を持つことは可能であるが、その場で連絡先を交換するのまでに至ることは少ない。接触は、その日、その場に限定されているのではないだろうか。特定の育児イベントの参加者たちは、主催者を媒介として他者と交流することが多い。その交流によって関係の形成が始まるが、インタビューの結果から深い関係を構築することはほとんどできていない。

要するに、子育てイベントや子供の遊び場で、固有の関係を強固にすることはできるが、新たな育児ネットワークを構築するのは難しい。育児支援組織の専門性は母親に信頼をもたらすが、他の人と信頼関係を作るのには長い時間の付き合いが必要であるため、短時間の接触で相手と人間関係を持つケースは少ない。その場で、話しができて、深い育児の協力関係へ発展することは観察できなかった。公共空間の育児ネットワークを構築するために、信頼できる第3者の存在がきっかけを提供していると考えられる。

5. 終わりに

本論文では、日本の少子化を背景に、現在の母親が直面している身近な育児支援者の減少について検討した。母親は、進学、就職や結婚の際に実家を離れ、他の場所へ移住する。移動がきっかけとなり、生まれたときから形成してきた地元の地縁がほとんど切斷される。インターネットの発展は、既知の人々と連絡を取ることで昔からの関係を維持するのに効果があるが、地元の人と育児ネットワークを持つことはほとんどできない。なぜなら、地元の友だち、近隣住民などは母親のことをよく知っていても、新しい家庭で誕生した彼女の子供との接触が少ない。特に、相手に子供がいなければ、子供に関する話しさえもなく、子供に関するネットワークを作るのは難しい。

その代わり、現住地で友人、同僚などと新たな関係を形成している。たまに連絡がある関係よりも、共通の知人が近くにいる、現在会える頻度が高い関係はより感情や時間の投入が多く、信頼関係がしやすいため、子供のことを知ることも可能である。そのため、出産後まで続く育児に関するネットワークは、家族、親族と移住先の友人、同僚などで形成されることが多い。また、出産の際にママ友、地域の育児支援組織と育児に関するネットワークを形成することは可能である。

本調査では、母親が家庭内、家庭外で様々な育児ネットワークを持っていることがわかった。同居家族内育児ネットワークは縮小しているものの、サポート全体の育児ネットワークは存在し、緩やかなつながりで結ばれている。ネットワークは豊富なほど、育児に関する社会関係資本が多い傾向があると考えられる。ただし、本論文の分析により、子育ては大まかに家庭内と家庭外で分かれている。育児ネットワークの各メンバーは、それぞれの領域で機能している。各個人や組織から受けられるサポートの量と質が異なっている。

血縁や婚姻関係がある協力者と母親は、互いにある程度閉鎖的な関係を持ち、信頼関係を維持している。強い信頼関係があるため、そのような協力者は「家」に自由に入り、実際の育児サポートができると同時に、精神的なサポートの領域でも頼れる相手になる。

そして、出産前から形成されてきたネットワークは、母親と共通の知人がいて、長時間の付き合いを通じてある程度の信頼関係を作ったから、母親に家庭外の子育て協力者として精神的なサポートを提供する。しかし、このような協力者は子供関係の仕事に従事している人々や子供を持っている人たちに限定される場合が多い。

子育てがきっかけで、人や組織と関係を構築することは、新たなネットワークをもたらす。そのプロセスには、お互いに感情と時間の投入が少ない。そして、このネットワークは、子供の成長に従って弱まり、投資する必要性も感じなくなる。そのため、お互いに信頼関係を形成するのは難しく、他の関係への転換は少ない。しかし、情報は集団の内部で流通する（パート、2001）ため、このネットワークは、育児情報交換には効果がある。同様に、同居者や家族、友人と形成された育児ネットワークも情報流通の機能を持っている。

育児のため利用し始める育児支援組織や保育園、学校など教育教養施設への投資も少ないが、そのスタッフたちは育児専門知識を持つため、その専門性は付き合いの代わりに信頼をもたらしている。教育教養施設は、情報を提供し、精神的な援助を提供するだけでなく、お昼の多くの時間に渡って子供を預かってくれるため、実際のサポートも提供している。

最後に、現在の母親たちはパソコンやスマートフォンを使い、他の使用目的で以前からインターネットと接触しているため、インターネットのメリットを理解しており、育児に関する情報もインターネットから得ることができる。しかし、育児の特性や閉鎖的な関係を形成するのは難しいことによりネット上の他者とは信頼関係を構築できない。インターネットは情報収集と精神的な面で育児のサポートをしている。

つまり、家族や友人、同僚と形成された密度が高い育児ネットワークは、母親に信頼をもたらしている。また、このネットワークのメンバーは、母親と育児以外の役割を持っていることが多い。母親と育児ネットワーク内の信頼関係を崩せば、他の役割関係に影響を及ぼす。そのため、血縁や婚姻、仕事などといった関係で形成された育児ネットワークには協力の量と質がある程度期待できる。また、弱い紐帯ではあるものの、育児支援組織は専門性があるため、母親に信頼をもたらしている。「ママ友」やインターネットで知り合った人々は、母親と共通の知人がほとんどいなく、いるとしても随時でその関係から脱出することも可能である。そのため、密度が高い育児ネットワークを構築できない「ママ友」などに育児の協力は期待できない。

6. 参考文献

- Burt, Ronald S, 2001, Structural Holes versus Network Closure as Social Capital.
in Nan Lin, Karen Cook, & Ronald Burt (Eds). Social Capital: Theory and
Research (Pp. 31-56). Aldine de Gruyter. (金光淳訳, 2006, 『リーディングスネット
ワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本—』 勁草書房)
- Coleman, James S. 1998, Social Capital in the Creation of Human Capital. American
Journal of Sociology, 94: S95-S120. (金光淳訳, 2006, 『リーディングスネット
ワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本—』 勁草書房)
- 橋本隆子・白田由香利, 2009, 「ソーシャルコンピューティング可視化サービスの検討」『情
報処理学会研究報告』データベース・システム研究会報告 149 (23) . pp1-7
- 弘前市ホームページ、子育て・教育「一時預かり事業」
([http://www.city.hirosaki.aomori.jp/kyouiku/kosodate/hoiku_itijiazukari.ht
ml](http://www.city.hirosaki.aomori.jp/kyouiku/kosodate/hoiku_itijiazukari.html), 最終閲覧日: 2021 年 12 月 25 日)
- 井田歩美・猪下光, 2014, 「乳児をもつ母親の育児情報ニーザーソーシャルメディア上にお
ける発言の分析—」『ヒューマンケア研究学会誌』第 6 巻第 1 号
- 伊藤淳子, 2001, 「女性とインターネット—女性がよく見るサイト、よく使うネットワー
クサービス」『情報処理学会研究報告』GM. (48) . pp1-6
- 金子隆一, 2002, 「少子化過程における夫婦出生力低下と晩婚化、高学歴化及び出生行動
変化効果の測定」『出生動向基本調査』第 12 回
- 河田承子・高橋薫・山内祐平, 2013, 「母親の情報収集力と育児情報活用に関する研究」『日
本教育工学会論文誌』37 (Suppl) , 125-128
- 小林真, 2004, 「インターネットの利用が母親の育児ストレスに及ぼす緩和効果」『富山大

- 学教育学部紀要』58. pp85-92
- 厚生労働省, 2020, 「令和2年版厚生労働白書—令和時代の社会保障と働き方を考える—図表1-1-7 出生数、合計特殊出生率の推移」
(<https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-01-07.html>
最終閲覧日: 2021年12月26日)
- 熊井正之・渡部信一・三石大, 2003, 「育児支援のためのオンラインコミュニティ構築の試み」『教育情報学研究』1. 31-37
- 久木元美琴, 2013, 「東京圏における子育て期の母親のインターネット利用とオンライン・コミュニティの役割」『地理科学』vol68no3. 177-189
- 前田宏治・加藤孝士・小川佳代・中岡泰子・富田喜代子・高橋順子・石原留美・尾崎八代・中澤京子・三木章代・吉村尚美・江口実希, 2013, 「A県における養育者のインターネットに関する意識——年齢・地域差に着目して——」『四国大学紀要』A41: 87-95
- 松田茂樹, 2013, 『何が育児を支えるのか——中庸なネットワークの強さ』勁草書房
- 目黒依子・矢澤澄子, 2001, 『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社
- 宮木由貴子, 2004, 「『ママ友』の友人関係と通信メディアの役割——ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係」『第一生命経済研究所』
- 内閣府, 「令和2年版 少子化社会対策白書」
(<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2020/r02pdfhonpen/r02honpen.html>, 最終閲覧日: 2021年5月21日)
- 内閣府, 「幼児教育・保育の無償化」
(<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/musyouka/index.html>, 最終閲覧日: 2021年7月25日)
- 小川佳代・中岡泰子・富田喜代子・前田宏治・加藤孝士・高橋順子・石原留美・尾崎八代・中澤京子・三木章代・吉村尚美・江口実希, 2013, 「A県における子育て支援ニーズに関する調査研究(その2)——育児ストレスの因子構造——」『四国大学紀要』A40: 13-19
- 大沢真理, 2011, 『平等と効率の福祉革命』岩波新書
- 榊原智子, 2019, 『「孤独な育児」のない社会へ——未来を拓く保育』岩波新書
- 園井ゆり・浅井宙, 2019, 『家族社会学—基礎と応用—第3版』九州大学出版会
- 総務省, 「令和2年版 情報通信白書」
(<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/pdf/index.html>,
最終閲覧日: 2021年5月21日)
- 住吉智子・脇川恭子・五十嵐真理・田中美央, 2015, 「未就学児の保護者のメディア・リテラシーにおける基礎的情報能力に関する研究」『小児保健研究』
- 高谷邦彦, 2019, 「サード・プレイスとしての Twitter——子育て主婦ユーザの場合——」『名古屋短期大学研究紀要』第57号
- 高橋直人, 2007, 「オープンソース SNS を使った幼児教育への取り組み: 物理的距離を越えた地域社会の再構築」『電子情報通信学会技術研究報告 ET』教育工学 106 (507), 17-21
- 高野良子, 2013, 『少子化社会の子育て力——豊かな子育てネットワーク社会をめざして』学文社
- 武市久美, 2014, 「子育てにおける SNS 利用について: 「ママ友」 コミュニケーションに着目して」東海学園大学人文学部人文学科

- 外山紀子・小舘亮之・菊地京子, 2010, 「母親における育児サポートとしてのインターネット利用」『人間工学』46, 53-60
- 外山紀子, 2011, 「母親の育児におけるインターネット利用」『日本人間工学会』第52回大会
- 筒井淳也, 2017, 『仕事と家族—日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』中公新書
- Wellman, Barry, 1979, The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers. American Journal of Sociology, 84:1201-31. (野沢慎司・立山徳子訳, 2006, 『リーディングスネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本—』勁草書房)
- 山田隆, 2005, 「子育てにおけるインターネット利用—携帯電話における子育てホームページ—」『東海女子大学紀要』25. pp151-162
- 山崎さやか・篠原亮次・秋山有佳・市川香織・尾島俊之・玉腰浩司・松浦賢長・山崎嘉久・山縣然太郎, 2018, 「乳幼児を持つ母親の育児不安と日常の育児相談相手との関連: 健やか親子21 最終評価の全国調査より」『日本公衛誌』第7号第65巻
- 吉住優子・辻川ひとみ, 2007, 「インターネットにおける出産と子育てに関する情報収集・交換の現状について」『日本デザイン学会』第54回研究発表大会